目　次

調査を実施して……1
本報告書の要約……3

1．調査の目的とサンプル
1）調査の目的……5
2）調査票の構成……6
3）サンプルの構成……6
4）サンプルの特性……8

2．高校入学をめぐって
1）入学したい高校だったか……13
2）入学が決まった時の気持……17
3）生徒たちはがんばったか……19

3．ランクと高校生活
1）学校生活は楽しいか……21
2）高校生活の評価……26

4．高校間格差とは
1）自分の学校に対する誇り……38
2）誇りを支える要因……42
3）地域の中での評価……43
4）教師の質……45
5）ランクとは何か……51

5．まとめに代えて……68

●調査票見本……71

調査を実施して…

この調査「高校間格差」は，中学３年生の子どもを持つ親の，深い吐息の中から生まれたと言ってもよいだろう。

ちょうど今から１年とすこし前，われわれの調査チームのメンバーのうち，深谷昌志と深谷和子は，長男の高校受験をひかえ，親として追いつめられた気持でいた。第一志望校の決定を，長男の担任から迫られていたのである。

しかし考えてみると子どもの受験する高校の決定に，親が参加しなければならない，とは，本来おかしなことである。

高校を受験できる年齢まで子どもが成長すれば，当然，将来も含めて，その進路は子どもが決めるべきだし，その力も持っているはずなのだ。しかし，現在の日本の，過熱したそしてクレイジーとしか言いようのない受験戦争の渦中にあっては，年端も行かぬ（この事態に対応するには，という意味で）15才の子どもに，どうして，「自分でいちばんいい道を」などと，調子のいいことを言って済まされるだろう。学校側は当然のことのように，志望校の決定に親の参加を要求し，親の側もまた，子どものために何とか最善の判断をというせっぱつまった気持にさせられる。他人のことなら何とでもクールなことが言える。しかし，わが子が目前に，嵐の中でほんろうされている姿を見ると，今の受験体制とそれにかかわるすべての事象に，フツフツと怒りがこみ上げてくるのだった。

ちょうどその頃，東京都では，都立高校の入試科目を３科目から５科目に引きあげるべく，審議会を設けていた。マスコミはこの問題をとり上げ，何かにつけて，偏差値の谷間であえぎ傷つき，高校間格差の重みによって，人間としての誇りを失いかけているかのような生徒たちの実情が，いやでもわれわれの目や耳に入ってくることとなった。たとえば，ある学校にめでたく合格しても，10年前なら，「Ｂ校に合格？　バスケットの強い学校でしょ。おめでとう。よかったね」とお互いに心から喜びあえたのが，今では「Ｂ校？　偏差値は45？　うーん，（Ｃクラスの高校か）」となるのだと言う。多くの子どもが偏差値で裏うちされた校章をかくしたい心境で，バス停や駅ですれちがい，相互に冷やかな目を投げあうのだという。こんなことがあっていいのだろうか。

その当時，親としての私たちをおそった感情の嵐を，このまま終わらせたくはなかった。この体験は，今の日本の多くの親，多くの子どもたちの運命にかかわる重要なテーマではなかろうか。子どもが無事，高校生になったからといって，「あの時は，親も子もせつなかった」で，済ませたくはなかった。『モノグラフ高校生'81』のテーマとして，子どもたちの心情にせまる調査を，ぜひしてみたいと考えた。明石要一氏，高橋美恵氏，穂坂明徳氏の参加をえて，調査票の作成がはじまったのは，長男が高校生になった桜咲く４月であった。

しかしこの調査はむずかしかった。研究者の関心から，もっとシャープな切り込みをしたいと思っても，この調査票に回答してくれる高校生たちの心情を思うと，傷口を洗うような質問はできなかった。苦心に苦心を重ね，このくらいならギリギリ，回答する生徒たちに許してもらえるだろうという線で，やっとまとめたのが巻末に掲げた質問項目である。

それでも，この調査に答えてくれた高校生たちには，あまり愉快な思いをさせなかったか所が，あったかもしれない。もしそうだとすれば，この紙上を借りて，おわびしておきたい。しかし，このモノグラフが出ることで，たとえわずかであっても，いまの受験体制の問題点や，高校生活のあり方について，改めて考える人々がでて来てくれれば，ぶしつけな質問や愉快でなかった体験を，彼らに多少たりとも，許してもらえるのではないだろうか。

最後になったが調査実施にあたっては，いつものことながら，多くの高校の先生方，生徒の方々に，ご協力いただいた。厚くお礼を申し上げたい。

また，調査の実施・モノグラフの刊行については，福武書店の全面的なご協力を得た。福武書店社長・福武哲彦氏，高校通信教育部・佐藤信氏，中村節子氏はじめ，関係者の方々に心から感謝したい。

なお，本調査の調査票作成にあたっては，われわれの研究会のもう一つのワーキング・グループの，武内清，耳塚寛明，苅谷剛彦，樋田大二郎氏に，有益な助言をいただいた。あらためてお礼を申し上げたい。

昭和56年3月

奈良教育大学教授　深谷　昌志
東京学芸大学助教授　深谷　和子
千葉大学助教授　明石　要一
神奈川県立港南台高校教諭　穂坂　明徳
千葉県教育センター所員　高橋　美恵
東京学芸大学大学院　横井富美子

（執筆分担　1，2章　深谷和子
3，4，5章　深谷昌志）

本報告書の要約...

1 本調査のサンプルは，4都県17校の高校生5,853名である。

2 これらの17の高校を，国立大学の進学者数による便宜上の尺度を用いて，AからDまでの4ランクに分類した。

3 Aランクの高校の入学者は，小学校5・6年の段階で，クラスで，トップだった者が，45%(中学で42%)，4～5番までをトップクラスと名づければ，72%がこれに入る層である。

Bランクの高校の入学者で，最も多い成績階層はクラスで4～5番だったもの，更にC・Dランクでは，まん中ぐらいが，これにあたる。中の下以下の成績階層の者は，Dランクでも，わずか10%程度にすぎない。

4 現在，入学している高校に,「ぜひ入りたかった」と答えた者の割合は，Aランクから順に，37%，39%，22%，10%の通りである(図1)。

5 中学での受験指導が徹底しているためか，どのランクの生徒たちも，6～7割が,「自分の実力相当の学校」と答えている(図2)。

6 入学が決まった時，生徒たちは，ランクに関係なく,「これで，しあわせな高校生活が送れそう」というような安堵感を味わっている。しかし，そうした反面，すでに入学時点で，C・Dランクの生徒たちは，望みとする大学進学が遠のいたと感じている(図4)。

7 入学時での気持はともあれ，現在，通学が「かなり楽しみ」と答えた者の割合は，41%(Aランク)，34%，33%，33%の通りで，ランクによる開きは，ほとんど認められない(図5)。

8 授業や先生との関係に充実感を見出している生徒は，1割前後にすぎず，学校生活の楽しさを支えているのは，友だちとのつき合いのようである。こうした傾向は，在籍高校のランクに関係なく，すべての学校に共通している(図6)。

9 高校生活に対する評価に，ランク間の開きが見出されないのと対称的に，将来の進路については，ランク間の差が大きく，入試のむずかしい大学進学を目指す生徒の割合は，Aランクから順に，88%，69%，36%，19%である(表15)。

10 一浪して頑張って，一流大学を受験した場合，Aランクの高校生は，仲間の26%が入学できると考えているのに反し，Bランクでは14%，C・Dランクでは，5%程度の仲間しか入れないと予想している(図15)。

11 今の高校の生徒であることに,「とても」,「かなり」誇りを持っている生徒の割合は，Aから順に，28%，20%，12%，8%である(表18)。

12 「その学校の生徒であることがわかると，地域の人がとても，あるいは，かなり尊敬してくれる」と感じている生徒の割合は，Aランクから順に，49%，28%，13%，7%である(図19)。

13 Aランクの生徒たちは，自分の学校にしっかりとした先生が多いと思っている(表21)。

14 Aランクの生徒たちは，学力だけでなく，やさしさやユーモア，リーダーシップなど，ほとんどすべての面で他のランクの生徒より，自信を持っている(表24)。

15 「現在の高校を卒業すると，社会的に成功する仲間が多いから，なにかと便宜を図ってもらえる」と思っている生徒の割合は，Aランクから順に，15%，6%，2%，2%である(表29)。

16 「まじめにコツコツと勉強をするタイプ」の後輩から相談を受けた時,「自分の学校をぜひ受験するように」と勧める生徒の割合は，Aランクから順に，34%，29%，18%，9%である(表31)。

17 全体としてのまとめ

大学進学や将来の職業選択などの項目で，高校間の反応に大きな開きが見出された。しかし，Aランクの高校には，もともと，学業成績の良い生徒が入学するのであるから，こうした開きは，インプットされた生徒の質の開きを反映したものと考えられる。そして，Aランクの高校でも，授業の楽しさを感じている生徒が1割にすぎない事実が示すように，高校の教育は，インプットされた生徒の質に依存するだけで，学校としての影響力を及ぼしていない印象を受ける。それと同時に，C・Dランクの高校では，挫折しがちな生徒たちの心に目を向ける教師の姿勢がきわめて乏しいように思える。

1 調査の目的とサンプル

※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

1） 調査の目的

本調査は，高校生（普通高校に限定した）の心の中にある「高校間格差」の意識を，4つの学校ランクから抽出された17校の高校生たちの反応を比較する形で，明らかにしようとしたものである。

最近の相つぐ校内暴力，または表面には出にくいものの，多発しはじめている気配のある家庭内暴力が，もっぱら，中学生の上に起こっていることからもわかるように，いま，あらゆる学校段階で，いちばん多くの問題を内包しているのは，中学校であるとも言われる。これは，当事者である，中学校の教師たちが，いちばん強く感じていることかもしれない。たとえば，昭和55年から，小学校で実施された，いわゆる「ゆとりの時間」をとってみても，小学校の体質を変えるためには，この時間の導入は，ある程度カンフル剤的な機能を果たしたと評価されているのに中学校の場合はこの試みに対して，いまひとつ消極的な感じで効果も上がっていないように思う。しかし，教師たちに言わせると，中学教育は，高校進学をひかえているだけに，小学校のように身軽な行動をとれないという。

たしかにこのところ，高校進学をめぐる状況は，1年ごとに深刻さを増している感がある。15歳の少年・少女たちが，偏差値という尺度で，なん通りにも，あるいは，十なん通りにも切断される，いわゆるハム・スライスの過程が，現在の高校入試だと言われる。

トップ・ランクの高校へ入学できそうな生徒は，その中でも超一流の高校を，そして，まずまずの高校へ入れそうな生徒は，せめてもう1ランク上の高校へと，それぞれの成績階層の間で，1ランク上を目指したミクロな戦いが，ほうぼうで，くりひろげられている。そうした渦の中に巻きこまれてしまうと，それらの尺度が何を意味し，果たして尺

度としての妥当性を持っているかを，考える余地もなく，ひたすら，上のランクを目指そうとするのが人情というものであろう。

この調査は偏差値によって，明らかにされるいわゆる高校間格差とは何なのかに接近する目的で実施された。特に，それぞれのランクの高校に在籍している生徒たちが，どの程度，ランクを意識し，そして，ランクの功罪を，どのように考えているのかを分析の中心に据えることにした。

2) 調査票の構成

調査票の全体は，巻末に付した通りであるが，すでにふれたように，本調査の目的から，高校生たちの心の屈折を問うような，微妙な設問が多くなったため，調査票の表現を，「高校生の価値観についての調査」と，わざと内容とズレたものにした。これは心理検査法でよく用いられる方法で，望ましくない先入観や，調査票配布の際のネガティブな反応を避けるためのものである。調査をお引き受けくださった高校，および生徒の方たちに，おわびするとともに，われわれの意図をご理解いただければ幸いである。内容は大別して，

① 現在の高校生活とそれへの適応　2 3 4 5 6

② なぜ現在の高校へ入学することになったか　8 9 10 11 12 13 14

③ 自分の高校への評価と展望　15 16 17 18 19 20 21 22 23

④ 自分について（現状と未来）　7 24 25 26 27 28

となっている。やや刺激的だったり，ストレートな質問（生徒たちにとって，必ずしも愉快でない質問）は，なるべく目立たぬよう，自然に答えられるよう，配列に苦心してある。回答選択肢の尺度の方向も同様である。調査は，昭和55年９月から10月にかけて実施された。

3) サンプルの構成

5,853名の高校生

本調査の対象校は，表１・表２に掲げた４都県（東京，東北，北陸，九州）の17校で，高１－ 1,886名，高２－ 2,014名，高３－ 1,939名，不明14名，計 5,853名の高校生から，調査票を回収した。この17校の抽出は，次のように行われた。

われわれは，今，高校間格差に伴う生徒たちの意識への接近を試みようとしている。従って，サンプルを抽出するのに，まず，いくつかのランク（世間的に格付けされたクラス）を想定し，その各々にあてはまると思われる学校をリスト・アップすることから始めなければならない。しかし，言うまでもなく，それぞれの学校は，それぞれ個有で独自で，しかも多面的な価値を内包している。また同一の学校環境にあっても，一人一人の生徒が学校に見出す意義や価値は，それぞれ少しずつ違ったものであろう。とすれば，むやみに学校の外から，Ａランクとか Ｂランク，一流校と二流校などと格付けをすることは，きわめて心ない行為のはずである。しかしにもかかわらず，現実には，このようなランクづけされた高校観が世間一般にまぎれもなく存在するし，また生徒たちは，外部からその高校にはられたラベルを受け入れ，それをそのまま自我の一部として取り入れてしまっている感じをうける。

このことに悪魔的とも言える力を発揮したのが，コンピューターの発達であり，偏差値であることは，誰もが知っている。本来は順列をつけられないはずのものに，あまりにもやすやすと序列をつける。われわれが日常何気なく使っている「格差」という語は，辞書によ

ると「等級をつける」「値段をつける」ことを意味すると言う。格差という語を学校に対して用いることが，どんなに生徒たちに対して非教育的な行為なのか。いつのまにかそれを忘れてしまっていたのではないだろうか。

しかし，本調査の目的のためには，やはり何らかの基準で，高校を分類しなければならないだろう。高校間の格差，という概念を固定させるためではなく，逆に，こうしてラベルを安易に，または決して使用しないようにするために，あえてこのような分類をする必要があると考えたのである。

表1　サンプル校とランク

	東京	東北X県	北陸Y県	九州Z県
ランクA	①♂ 137(32)　495	②♂ 263(130)　365	③♂♀ 93(39)　134	④♂♀ 271(105)　443
ランクB	⑤♂♀⑥♂	⑦♂	⑧♂♀ 77（12）　300	
ランクC	⑨♂♀	⑩♀	⑪♂♀⑫♂♀ 29（1）　363	⑬♂♀⑭♂♀
ランクD	⑮♀ 1(0)　247	⑯♂♀ 3(0)　295		⑰♂♀ 1(0)　360

※　♂男子校　♀女子校　♂♀共学校

※　①⑥⑮は私立校，他は国公立

※　ランクB，ランクCの数値は平均値

※　数値の順序は，左から，昭和55年度国立大学合格者数，(　　)内旧制帝大合格者数，学年人数

※　ここでは，旧制帝大合格者数を，いわゆる一流大学への合格者率を示す1つの目安として用いた。

表2　サンプルの構成

N＝5,853　(人)

	高　1			高　2			高　3		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
A	356	134	490	370	132	502	311	116	427
B	240	110	350	267	127	394	235	115	350
C	304	350	654	328	397	725	354	430	784
D	128	254	382	130	263	393	127	251	378
全体	1,028	848	1,886	1,095	919	2,014	1,027	912	1,939

不明＝14

A・B・C・Dの4つのランク

以上のことをふまえながら，われわれは，東北，関東，北陸，九州の4つのエリアをえらび，その各エリアから次の基準にしたがってそれぞれの対象校をえらんで，調査協力を依頼した。表中1部に欠けるか所があるのは，それぞれの事情による。AからDの4つのランクは，55年度の国立大学合格者数を基準にした。(国立大学に限ったのは，他意があってのことではない。私立大学をもあわせてもよかったのだが，単に資料の利用上，そうしただけなので，ご了解いただきたい。)

ランクAは，ほぼ1校で，1年間150名位以上，国立大学合格者を出している高校。ランクBは30名から100名ぐらい。ランクCは，5名から15名ぐらい。ランクDは，1名以下，という基準である。これらは厳密には，生徒数と合格者の比で，抽出されなければならないだろう。しかし世間的には，何十人もが，国立大へ合格する高校とか，1人も合格しない高校，のような印象が先行し，人々の高校イメージを，作り上げているとも，考えられる。したがってこのような基準を用いた。

なお，A・Bランクについては，校名の推定がしにくいように，表中の合格者数を概数とした。

また（　）内に，いわゆる一流大学の合格者を掲げたのは，ここで言うAランクの上に，スーパーAランクも，存在するであろうことを暗示したかったのである。同様にここでのDランクが，必ずしも，高校の最下位ランクを意味していないのは，むろんである。ただ国立大学へ1名以下しか進学しなかったということにすぎず，多分これらの高校は，高校全体の中では中もしくは中の下のランクであって，決して下ではないように思われる。実際には，このような基準について，われわれと，入試についての情報にくわしい何人かの専門家が，校名をもとに，検討をくわえたが，Aとは，スーパーAを除いたAクラス，Dとはほぼ中の下，という（世間的な）印象に，ほぼあてはまるものだという点での意見の一致をみた。

4) サンプルの特性

Aランクの72%は小学生時代トップクラス

以上の観点で分類された4つのランクに属する高校の性質を明らかにするために，いくつかのデータをひろってみよう。まず表3は，5,853名の生徒たちの小学校5・6年以降の成績（本人の想起による）である。ここで驚かされるのは，ランクと，学業成績との，(過去の早い時点での）大きな相関である。小学校5・6年と，中学1・2年の2時点をとって，記入してもらったのだが，その間にほとんど移動がない。まずAランクの高校の生徒は，実に45%が，小学校5・6年生の時，クラスでトップの座にあった者たちである。4～5番までを，トップクラス，と名づけるなら，実に72%がトップクラスの者たちから成る。Bランクでは，すこしおちて，4～5番の者が，31%と最も多くの割合を占める（トップクラスの者は，58%)。C・Dランクでは，まん中ぐらいだった者が最も多く，41%と46%（トップクラスの者は，26%，22%）である。すなわち，小学校高学年で，クラスの中位にいたのでは，将来CまたはDランクの高校への合格が，自然の成り行き，または最も可能性の高い運命ということになる。親の身となれば，小学校5・6年生で，クラスの中ほどにいてくれれば，まだまだ勝負はこれから，当然，A・Bランクの入学のための土俵にいると思うのが，人情であろう。むろんその可能性は，あるといえばあるのだが，決して大きな可能性ではない。本調査結果からみると，小学校高学年で，中の下で

あれば，C・Dランクですら，望みはきわめて薄いことになってしまう。筆者は，こうした運命が，しだいに輪郭をあらわしはじめるのは，中学2年ぐらいからかと，ばくぜんと考えていたのであるが。

表3　過去の学業成績とランク　(%)

		トップ	4～5番	10番位	まん中	下の中位	うしろの方
小学五～六年	A	45.4	26.2	12.2	11.3	2.6	2.3
	B	27.6	30.7	16.2	19.0	3.5	3.0
	C	8.6	17.0	20.7	40.9	8.4	4.4
	D	5.3	17.1	22.3	45.5	7.6	2.2
	小　計	20.5	21.8	18.1	30.5	5.9	3.2
中学一～二年	A	41.5	26.8	17.1	9.9	3.1	1.6
	B	22.2	35.0	25.0	13.5	2.7	1.6
	C	8.3	15.5	26.7	40.6	6.3	2.6
	D	4.0	13.2	28.9	44.0	7.3	2.6
	小　計	18.1	21.5	24.5	28.7	5.0	2.2

現在の家庭学習時間の長さをみると

彼らについての過去のデータは，ひとまずこのくらいにして，次に，彼らの現在の生活ぶりを概観してみよう。まずはじめに，彼らの現在の勉強ぶりの一端として，家庭学習時間の長さを表4に掲げた。

毎日3時間以上家で勉強している生徒の割合は，Aランク－51%，Bランク－35%，Cランク－23%，Dランク－18%と，やはりAランクによく勉強する者の割合が多く，ランクが下がるに従って，割合が減ってくることがわかる。

またこれを学年の推移にしたがって見てみると，全体として，1・2年では，どのランクでもまあまあの勉強ぶりだが，3年生になるとぐっと勉強に追い込みがかかる点は，共通である。しかし，ラストの追い込みは，Bランクが最も猛烈で，3時間以上の勉強をする者は，1年－15%，2年－21%，3年－70%と，急激に上昇する。ところがAランクは，1・2年のうちから全体がわりとよくやっていて，1年で34%，次いで2年47%，3年75%と，カーブの上昇はそれほど急激ではない。さらにC・Dランクは，Bランクとは，また一線を画していると言えるかもしれない。1・2年ではBランクとそれほどの差がないが，3年生になっても，ラストスパートがかからない。危機的状況，または天下わけ目の関ヶ原で，いまひとつがんばり切れない，底力の弱さが，C・Dランクと，B（またはA）ランクを大きく分けることになるのだろうか。

表4　家庭学習の長さ

(%)

		しない	1時間以内	1時間台	2時間台	3時間以上
A	高 1	5.1	5.7	19.0	36.1	34.1
	高 2	2.4	4.8	14.5	31.1	47.2
	高 3	8.0	1.9	5.2	10.1	74.8
	小 計	5.5	4.3	13.3	26.0	50.9
B	高 1	6.9	12.0	32.9	32.9	15.3
	高 2	10.7	8.9	24.4	34.7	21.3
	高 3	8.6	0.9	4.0	16.9	69.6
	小 計	8.8	7.3	20.6	28.4	34.9
C	高 1	9.0	14.4	40.6	25.4	10.6
	高 2	15.7	12.1	35.8	22.5	13.9
	高 3	12.2	2.9	19.5	24.1	41.3
	小 計	12.6	9.5	31.2	23.9	22.8
D	高 1	10.2	16.6	36.4	27.6	9.2
	高 2	14.0	11.7	38.1	26.0	10.2
	高 3	12.7	5.0	20.6	26.7	35.0
	小 計	12.3	11.1	32.2	26.6	17.8
	計	10.1	8.1	25.1	25.8	30.9

表5　テレビ視聴時間

(%)

		1時間以内	1時間~1.5時間	1.5時間~2時間	2時間台	3時間以上
A	高 1	14.3	28.8	13.9	29.9	13.1
	高 2	17.3	29.9	13.7	28.3	10.8
	高 3	21.3	29.1	11.0	26.9	11.7
	小 計	17.5	29.3	12.9	28.4	11.9
B	高 1	18.0	26.3	13.4	29.7	12.6
	高 2	12.2	20.1	11.4	38.5	17.8
	高 3	12.3	27.4	16.6	29.7	14.0
	小 計	14.1	24.4	13.7	32.9	14.9
C	高 1	9.3	18.3	12.8	32.7	26.9
	高 2	9.2	18.5	9.4	35.9	27.0
	高 3	9.8	22.1	9.6	31.5	27.0
	小 計	9.6	19.7	10.5	33.2	27.0
D	高 1	4.8	11.0	11.7	42.1	30.4
	高 2	6.6	14.0	7.9	38.4	33.1
	高 3	10.6	12.4	8.7	38.9	29.4
	小 計	7.3	12.5	9.6	39.7	30.9
計		11.9	21.5	11.5	33.3	21.8

ＴＶ視聴時間の長さは

さらに家庭学習の裏のデータとも言えるＴＶ視聴時間の長さを見てみよう（表５）。

まず１日に３時間以上の長時間のＴＶ視聴者をとってみると，Ａランク12%，Ｂランク15%，Ｃランク27%，Ｄランク31%とどのランクにも，決して少なからぬ割合の者がいるのに，まずおどろかされる。しかし，むろん下位のランクの生徒の方が，その割合は高い。

また，高１から高３と，学年別の推移を追ってみると，おもしろい結果が見出される。１日１時間半以内の短時間視聴者を表わした次の表６を見ると，全体としてはＡからＤの順に，47%，39%，29%，20%と先に見た長時間視聴者の場合とは逆に短時間視聴の割合が減少しているが，各ランク内で，学年による推移をみると，ほとんど数字の変化がない。Ａランクをとると，１年から３年は，43%，47%，50%であり，わずかな増加にすぎない。Ｄランクをとってみても，16%，21%，23%と，これも僅少な増加率である。先に，家庭学習の時間が，とくに３年になって飛躍的に増加することを見て来たが，これとあわせて考えてみると，ＴＶ視聴は，他のどんな時間よりも，生活の中で恒常性をもっていることがわかる。多忙になれば，他の余暇時間は犠牲にするが，ＴＶ視聴だけは，一定時間を確保する。それが現代の生徒たちのライフ・スタイルなのであろう。

表６　ＴＶ視聴時間
（１日1.5時間以下）

（%）

	A	B	C	D
高　1	43.1	44.3	27.6	15.8
高　2	47.2	32.3	27.7	20.6
高　3	50.4	39.7	31.9	23.0
全　体	46.8	38.5	29.3	19.8

部活動は

最後に部活動の様子を見てみよう。表７は，まず全体を概観したものである。

サンプルの高校生全体としては，一度も何の部にも属さなかった者は９%と，僅少で，他の91%は，かつて何かの部に属していたか，または現在も活動している者たちである。系統としては，運動部39%，文化部27%と，運動系がやや優位である。おもしろいのは，ランクごとの差がそれほどでないことで，たとえば運動系に例をとってみても，Ａランクから，40%，49%，36%，37%と，大差はない。文化系では，同じくＡランクから，20%，25%，28%，36%と，こちらは，下位ランクの方が，やや盛んな傾向はあるが，これまで見てきたランク間の諸データの差ほどではない。

しかし，学年別の推移を見ると，ランクによる特色が現われる。表８に示したように，部活動を現在していない者の割合をとると，Ａランクでは，学年の推移にしたがって，１年は25%，２年38%，３年84%と，３年生（５～７月）で大きく増加する。他のランクも，同様な傾向が見出されるが，Ｄランクでは，部活動をしていない者の割合が，３年になっても，それほど飛躍的に増加しない。ちなみに，高３で，部活動をしていない者の割合は，

Aランクから，84%，69%，68%，60%，という数字になっている。Aランクの受験校としての性格が，ここにあらわれていると言えよう。

表7　部活動の所属　(%)

		サンプル全体	ランク A	B	C	D
入ったことはない		8.5	14.3	2.3	9.6	5.0
入っていたが、やめた		25.1	26.4	23.3	26.3	23.2
運動部	積極的	31.9	30.9	39.3	30.4	28.9
	サボりぎみ	7.3	8.6	9.7	5.5	7.0
文化部	積極的	16.8	12.4	14.5	18.7	20.8
	サボりぎみ	10.4	7.4	10.9	9.5	15.1

表8　クラブ活動（毎日平均して費やす時間）　(%)

		入っていない	2時間以内	2時間半以内	3時間以内	3時間以上
A	高 1	25.4	20.0	16.5	17.3	20.8
	高 2	38.2	18.9	15.9	12.7	14.3
	高 3	83.8	7.3	5.6	1.4	1.9
	小 計	47.4	15.8	13.1	10.9	12.8
B	高 1	16.9	13.7	24.8	20.6	24.0
	高 2	32.3	12.4	13.7	23.6	18.0
	高 3	68.6	9.4	8.0	5.7	8.3
	小 計	39.0	11.9	15.4	16.9	16.8
C	高 1	27.3	21.4	25.1	14.1	12.1
	高 2	35.2	18.6	19.9	15.0	11.3
	高 3	67.9	12.0	9.4	5.0	5.7
	小 計	44.8	17.0	17.6	11.1	9.5
D	高 1	25.8	22.7	32.2	12.2	7.1
	高 2	33.1	26.2	26.7	8.7	5.3
	高 3	59.5	18.5	13.5	3.7	4.8
	小 計	39.6	22.5	24.0	8.2	5.7
	計	43.4	16.8	17.4	11.5	10.9

2．高校入学をめぐって

※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

1）　入学したい高校だったか

以上のように格差のある（と世間で言われている）高校に在学している生徒たち。むろん現在では，それなりに学校に対する誇りをもち，また他方では，不満や失望をも感じているであろう彼らが，何年か前の，入学した時点ではどうだったのであろうか。本当に入りたくて，希望して入学して来た高校だったのか。それとも種々の事情から，仕方なく入って来た高校だったのか。そしてそれに至る経緯はどのようなものだったのか。それをまず見て行くことにしよう。

74%が，それなりの痛手を負う

まず図1をごらんいただきたい。これは，「あなたが現在通学している高校は，はじめから入りたかったと思っていた高校でしたか」の設問に対して，「ぜひ・かなり・まあ」入りたかった高校，「あまり・絶対」入りたくなかった高校，と答えた者の割合を，学校ランク別に表わしたものである。

全体としては，まあも含めて「入りたかった」者77%，「入りたくなかった」者23%で，欲を言えばこの77%は，100%であってほしかった気もするが，77%ならば，まあまあの数字と言えるのではなかろうか。

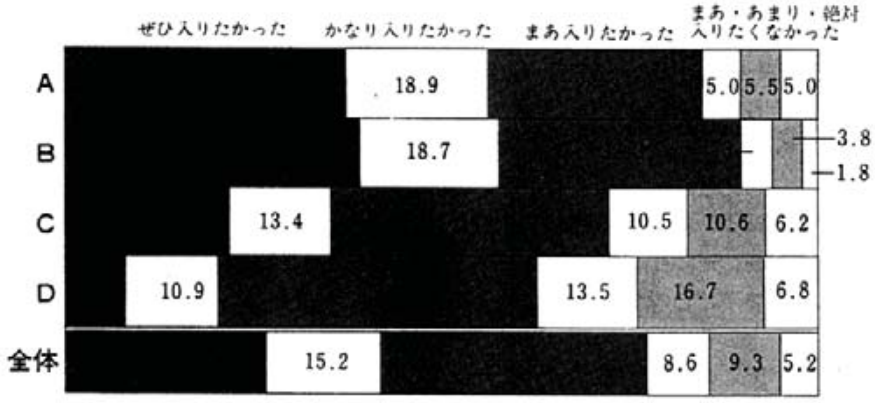
親の願いおとなの願いとしては，どんな経緯をへたにせよ，子どもたちが，最終的には「入りたかった高校」に，入学することになってほしいと思う。高校が10あれば，残念ながら世間的には，それなりの格付けがされ，外側から見た基準で，いわゆる有名校から，そうでないものまで，に分かれてしまう。しかしそれにとらわれず，生徒たちが「自分はこの高校

に入りたい」と願って最終的な入学を決めてくれたのであれば，親としてどんなに安心か。むろん入試には運不運がつきもので，一定の割合で，失意の者が輩出することは避けられない。しかしそうした点を考えても，「入りたくない高校だった」者が23%という数値は，まあまあの結果だと言えるのではなかろうか。これらの者たちも，入学後に，若さの持つバイタリティーと回復力で，「予想していたのとは逆に，けっこう満足できる高校だった」と思ってくれたことを願っている。

しかし，もうすこし，こまかく数字を見て行くと，全体の感じは変わってくる。「ぜひ入りたかった」者の割合にしぼると，26%と，さすがに数値は低くなる。実はこれらの生徒たちだけが第一志望の学校に入学できて，手放しでバンザイと叫んだ層なのであろう。他の50%は，第一志望の高校は，自分の学力やその他の経済的地理的条件等からあきらめて目標を下げざるをえなかった層なのであろう。それなりに不満や失意も，心のかたすみに残して，中ぐらいの春を楽しむ，という心境だろうか。とすると，前のパラグラフで述べたことは，やや楽天的にすぎるのかもしれない。手放しでバンザイ26%。他の74%は，大なり小なり心理的に痛手を負って入学して来る。入試というものは，やはり過酷なものと言わなければならない。

しかも，本調査でとりあげた高校は，仮にDランクでも，高校全体から見れば，せいぜい中の下どまり。より下に格付けされた高校はまだ数多くある。そうした点をも考えあわせると，現代の青春とは，なんと重たいものだろうか。

図1　入学したい高校だったか　(%)



どのランクの高校にも，ぜひ入りたかった者がいる

さてこれを，学校ランク別に見て行くことにしよう。すでに述べたように，Aランクに含まれている高校は，昭和55年度に，最高271名から，最低でも93名（学校規模にかかわらず）の国立大入学者を出した高校であるのに，Dランクでは，わずか1名またはゼロと，国立大学入学者数だけを基準とした場合，その格差は明瞭である。

にもかかわらず，「ぜひ入りたい高校だった」と答えた者の割合は，むろんランクによる差はあるものの，客観的な基準ほどの差は見られないのが特徴である。「ぜひ入りたい高校」だった者は，A37%，B39%，C22%，D10%である。Aランクでも，37%しか「ぜひ」はいないし（おそらく，スーパーAランクを希望していた層が，いるのであろう。ちなみに，一流大学への合格者はこのランクで，多くて5割である）。逆にDランクでも，10%もの生徒たちがぜひにと希望して入って来ている。ただ比率がちがうだけで，どの学校にも，

胸をはずませて入学して来る生徒たちがいる。われわれは，そのことをしっかり受けとめなくてはならないだろう。たとえ数は少なくとも，自分の学校へ「ぜひ」入りたくて入って来た生徒たちの，期待にこたえるべく誇りを持って，教師として対応し，学校を運営して行かなければならないだろう。

逆に入りたくなかった生徒（まあを含める）は，A16%，B10%，C27%，D37%と，これもランクが下がるほど，ほぼ増加の傾向にあるものの思ったほど大きな差ではないと言ってよいだろう。Aランクですら16%もいるのだし，逆にDランクだって，37%しか入りたくなかった生徒はいないのである。

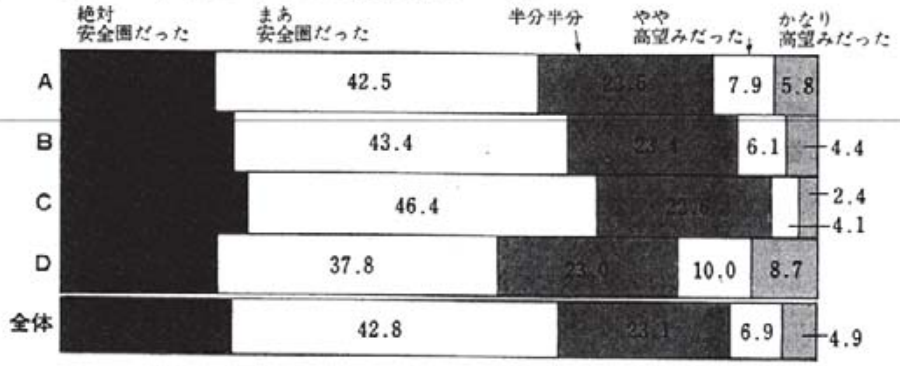
高望みできなかった子どもたち

こうした入学希望に関して，もう一つ別の角度のデータを見てみよう。ふつう志望校を決める時に，考える条件は大きく2つあるだろう。1つは，これまで見てきたような，それぞれの学校に対する評価やイメージであり，もう1つは，合格の難易度が自分の実力にふさわしいものかどうかであろう。

図2は，「あなたが入学した高校は，中学3年の頃の実力から考えて，どの位の難しさだったと思いますか」についての結果である。この図を見ると，「やや」も含めて，自分の実力に比べて高望みだった（危ない橋をわたった）と答えた者の割合が，非常に少ないのが特徴と思われる。全体でわずかに12%でしかない。半々（5分5分）が23%，実に66%が，一応の安全圏と考えて入試をうけたと答えている。しかも，その数字が，AからDの各ランクごとに変わらないのは，いくら偏差値の利用による受験指導が徹底している今日とはいえ，驚嘆する外はない。絶対の安全圏は，上から20%，23%，25%，21%とほぼ同じ。まあが，43%，43%，46%，38%，とこれまたほぼ同じ。あわせると，入るべくして入った（合格に伴うリスクがほとんど予想されなかった）生徒は，同じく，A63%，B66%，C71%，D58%となる。この中では，Dランク狙いが，ややリスクを伴う判断のしかたをされたものと考えられる。

いずれにせよ，あらゆる場合に，人生におけるアクシデントから子どもを守ろうとするおとなの配慮，逆に言えば，管理が行きとどきすぎて，冒険や挑戦の機会の与えられなくなった現代の子どもの姿。これは彼らにとって幸せといえるのだろうか。

図2　中学3年での実力と比べ（%）



両親の期待にこたえられた者50%

さてもう1つ別の角度から，高校の合格を見てみよう。図3は，「あなたが今の高校へ入学したことは，あなたのご両親の期待にこたえたと思いますか」に対する反応である。「とても・かなり」こたえたと思っている者は50%，「あまり・まったく」こたえられなかった者20%。中間（入学は一応のめでたい事なのだから，まったく喜ばない親はいないはずである。とすると，「ややこたえた」とする者を，ふつうのニュアンスで期待にこたえた層に分類することは妥当でないだろう。そこでこれらの層は，中間とした）30%となっている。

Aランク66%，Bランク62%，Cランク45%，Dランク28%と，さすがにランクとの関連を示している。

さらに，さきの入学したい高校だったか（図1）の数字と並べると，表9のようになる。自分の希望した高校に入れた者は，親の期待にもこたえられたと感じ，そうでないものは，親にすまなさの感情を持っているのであろうことが，読みとれる。高校入試の失敗（または失意）は，親もつらいが，子どももつらいだろう。50%の子どもが，親の期待にいまひとつ十分にはこたえられなかった(または，まったくこたえられなかった)と思っているのである。子どもの心情を考えると，親としてのわれわれは，せつない気持がする。

図3　入学は両親の期待にこたえたか　(%)

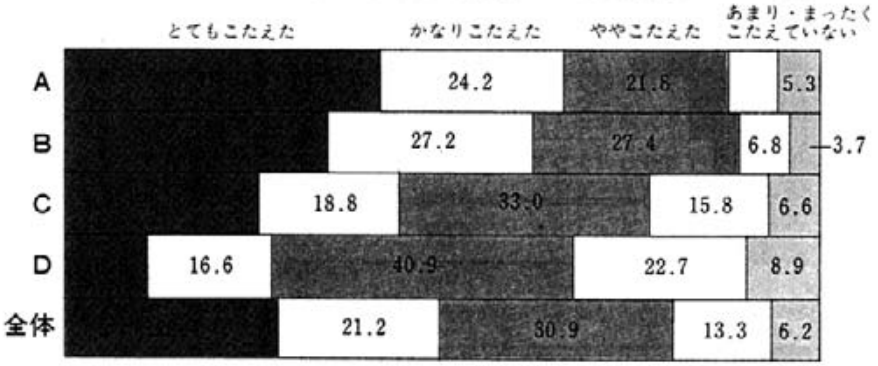


表9　入学の希望と親の期待　(%)

	希望した高校だった者	親の期待にこたえられた者
A	56.2	66.1
B	57.8	62.1
C	35.3	44.6
D	20.6	27.5
全　体	41.6	49.6

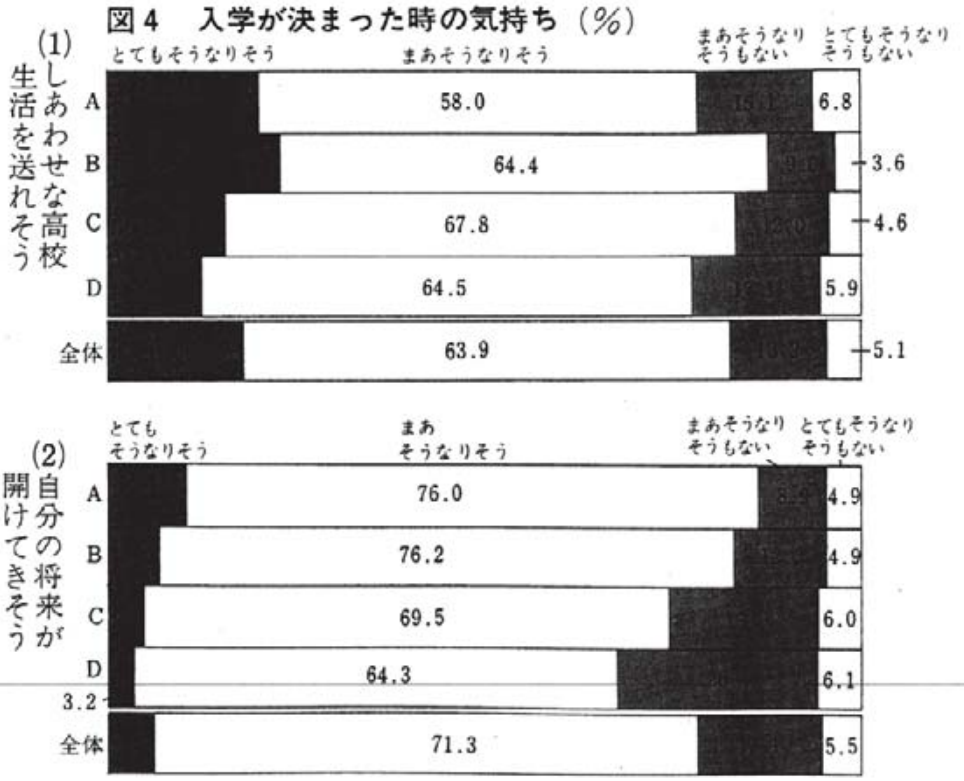
2) 入学が決まった時の気持

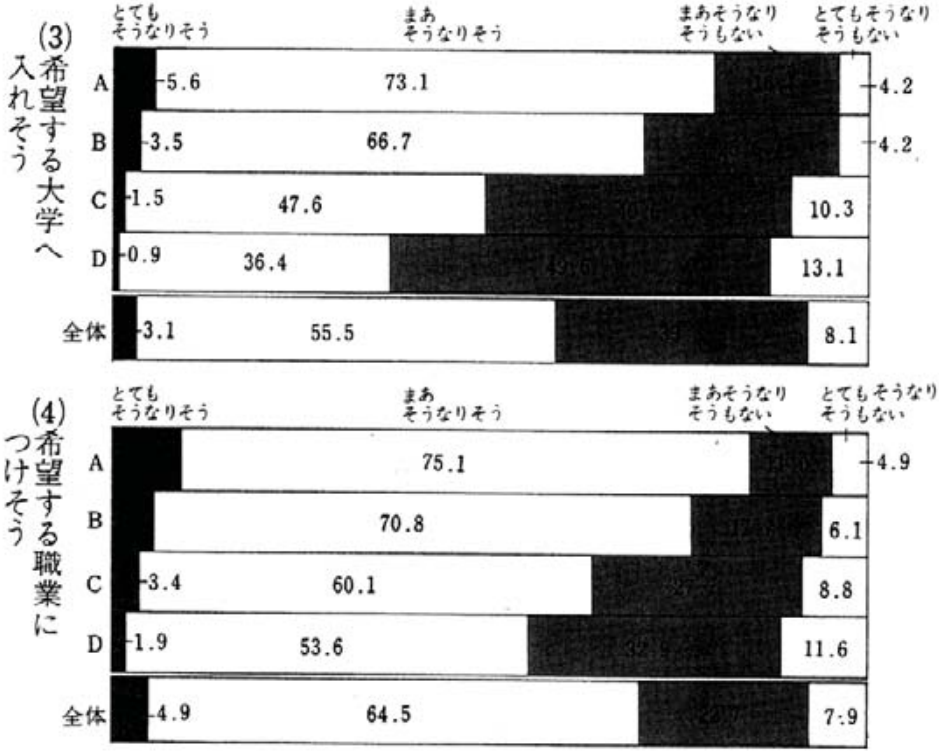
しあわせな高校生活を予想する者81%

まあまあ希望する高校へ入れ，十分ではなくてもまあまあ親の期待にこたえられたと思って入学の日を迎えた生徒たち。彼らは高校生活のスタートの時点で，未来にどんな展望を持ったのだろう。どんな高校生活が自分のえらんだ高校によって，約束されるものと感じていたのだろう。過去にさかのぼっての想起になるが，彼らは図4－(1)(2)(3)(4)のように答えている。

まず全体を通してみると，まあも含めて，図4(1)，これで,「しあわせな高校生活を送れそうだ」82%，図4(3)「希望する大学へ入れそうな気がする」59%，図4(4)「希望する職業につけそうだ」69%，図4(2)「自分の将来が開けてきそうな気がする」77%，となっており，全体として彼らの気持は軽々とはずんでいる。しかし，よく見ると，最も約束されそうなのは，スクール・ライフの楽しさ（図4(1)(2)）であって，大学進学については，半数近くの生徒が危惧を感じている。図4(3)に表われた,「まあ，希望大学への入学はかなわないだろう」33%,「とても無理だろう」8%という数値がそれである。

図4　入学が決まった時の気持ち（%）





これは特に，学校ランクによる差が顕著で，国立大学入学者が年間1名以下のDランクでは，63%が，そう感じているが，年間150名以上も入学するAランクでは，20%しか，そう思っていない。この点について，生徒たちは，まだくわしい数字までは知らないだろうが，なんとなく，自分の高校が，大学進学を助けてくれそうな環境かそうでないかを，いわゆる世間的な評判や偏差値ランクから把握しており，それが入学時のはずむ心の中で，1つのかげりとなっているのだろう。

それにくらべると，ランク間で反応の格差がいちばん少ないのは，「しあわせな高校生活」の予想で，この点の失望感の差は，たかだか10%程度にすぎない。すなわち図4(1)を見ると，失望感の低いのは，B・Cランク（13%，17%）で，高いのはA・Dランク（22%，23%）で，差は僅少である。

しかしこの場合のA・Dランクの数字の接近は，必ずしも同質の背景ではないと思われる。Aランクでは，もしかしたら3年間の受験準備の日々を予想する者の数字かも知れず，Dランクではむしろ，学校そのものへの失望感も含まれているかもしれない。

学校ランクによる差が，次に少ないのは，「これで未来が開けそうだ」とする抱負である。A・Bランクで76%，Cランク70%，Dランク64%と，差はこれまた僅少である。生徒たちが，一様に楽しいスクール・ライフを予想し，自分の未来が開けると，大部分の者が確信する。ピカピカの高校1年生たちのはずむ心が，伝わってくるようだ。

そして親であるわれわれ，教師であるわれわれにとっても，この数字は，やはり救いのある数字である。親や教師は，そうした灰色の日々を，子どもと共に悩み，迷い，そして傷ついてもきた。はじめの夢想的な目標設定から，しだいに現実を直視し，目標を下げざるを得なかった過程。それは時には，子ども以上に，苦しかった日々のようにも思う。そして中には，まだその傷口，その痛手から回復できないままにいる親も，世の中にはいる

かもしれない。

しかしこのデータを見ると，それは多分に，おとなの弱さ，つまりちいさな不幸から回復できない心の弱さからのように思われる。子どもとは，それなりにしっかりと現実を受け止め，それぞれ明日への期待に胸をときめかせることのできる，たくましい生き物なのではないだろうか。

3） 生徒たちは，がんばったか

3年間精一杯がんばった生徒は3％だけ

ここでまたすこし，生徒たちの過去をふりかえってみよう。はじめにあきらかにしたように，Aランクでは，中学1・2年の頃，クラスでトップだった子が42％，4～5番の子が27％，あわせて69％が5番以内という構成になっていた。それに対してBランクは，成績もちょうど1ランク下がって，最大値は，クラスで4～5番に集まっていた（35％）。そして，C・Dランクでは，クラスの真ん中ぐらいの子どもが40％強と，やはりランク別に，構成メンバーの学力のレベルが，かなりの違いを示すことを見てきた。では彼らは，中学3年間，どの程度，がんばって勉強してきたのか，そして受験勉強そのものに対しても，どのくらい，自分は勉強したと思っているのだろうか。

表10は，「あなたは，中学の3年間をふり返ってみて，自分はよく勉強したと思いますか。」に対する反応である。

入学してから何年かをへているので，月日をへて，印象が風化した部分もあるだろうし，また「よくやった」と言えるには，それぞれの子どもの要求水準も関わってくることなので，この数字の解釈にはむずかしい部分がある。しかし，とにかくこの表を見る限り，「精一杯やった」と言い切る者は，全体で3％と僅少で，しかもAランクですら，わずか7％。「十分とは言えないかもしれないが，よくやったほう」をあわせても，全体で21％。人並みが33％。逆にあまり勉強しなかった者が，47％という数字である。とくに「ほとんど勉強しないで」入学してきたと答える生徒が，どのランクにも16～18％いるのは，何を意味するのだろう。Aランクでは，天賦の才能，B・C・Dランクでは，余力を持ちながらも，それを使わなかった生徒たちか。

しかしむろん全体としては，人並みかそれ以上にやっていた者が，Aランク60％，Bランク55％，Cランク50％，Dランク48％と，努力度を反映しているが，しかし，ランクの内容ほどの差は見られない。

同様なことが，「受験勉強のがんばりぶり」についても言える（表11）。がんばった（ややも含む）者の割合は，Aランクから，64％，58％，55％，52％と，ランクに比例しているが，しかし，やはりランク間の差は，思ったほどではない。

受験勉強はむろん，日常の勉強についても，生徒たちは，それなりにがんばっている。

しかし，努力と成功は，必ずしも正比例しない。どのランクにも，精一杯がんばって，やっと入った者がおり，逆にほとんどがんばらなかったのに，（おそらく運か，天賦の才能のため）入ってしまった者がいる。ランクの間で，ただその比が違うだけにすぎない。うんとがんばった者だけがAランクに入っているわけでもなく，逆にDランクは，みな勉強しなかった者ばかりというわけではない。

われわれは，外側から，それぞれの学校を見ていると，つい同質的な集団であるかのように見てしまう。たしかに，偏差値の利用で，見かけの上では，同じ学力の集団になってしまっている。しかし，1人1人を見ていくと，そこには，あらゆる個性，生き方，過去

の努力、未来への希望の個人差がある。1人1人のそうしたものを、教師が、きめこまかく受けとめてやることの大切さを、あらためて思い知る気がする。

表10　中学時代の勉強ぶり

(%)

	勉強した			人並に勉強した	勉強しなかった		
	精一杯	よくやった方	小計		あまり	ほとんど	小計
A	6.9	25.8	32.7	27.8	23.2	16.3	30.5
B	4.2	20.0	24.2	30.8	28.1	16.9	45.0
C	1.7	12.5	14.2	36.3	31.3	18.2	49.5
D	0.9	13.9	14.8	33.6	34.0	17.6	51.6
全体	3.3	17.4	20.7	32.6	29.3	17.4	46.7

表11　受験勉強のがんばりぶり

(%)

	がんばった				がんばらなかった		
	とても	かなり	やや	小計	あまり	ぜんぜん	小計
A	9.3	22.4	32.0	63.7	23.8	12.5	36.3
B	5.7	21.1	31.4	58.2	28.1	13.7	41.8
C	3.6	16.4	35.0	55.0	30.8	14.2	45.0
D	2.2	8.1	28.1	38.4	38.7	22.9	61.6
全体	5.1	17.1	32.2	54.4	30.2	15.4	45.6

3．ランクと高校生活

※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

1）　学校生活は楽しいか

楽しくもつまらなくもない学校

前の章では，高校進学をめぐる考察を試みてきた。そこで，この章では，前章と同じように，学校ランクに留意しながら，高校入学後の生活に目をむけてみたい。

まず，表12に，「学校へ通う楽しさ」をランク別に集計した結果を示した。全体として，学校へ行くのが，「とても」あるいは，「かなり」楽しいと思う生徒がほぼ15%，逆に，「あまり」「ぜんぜん」楽しくないが20%という結果で，残りの3分の2の生徒は，「楽しいでもつまらないでもない」と答えている。つまり積極的に生きたい訳ではないが，かといって，嫌でもないという中途半端な感情が，学校に対する生徒の気持のようである。

表12　学校へ通うのが楽しいか

(%)

	楽しい				ふつう	楽しくない				
	とても	かなり	小計	やや	位	やや	小計	あまり	ぜんぜん	小計
A	7.5	11.3	18.8	21.8	34.0	9.2	64.9	10.1	6.2	16.3
B	5.4	9.3	14.7	19.1	37.7	10.1	66.9	11.2	7.2	18.4
C	4.3	8.9	13.2	19.6	36.7	10.1	66.4	12.5	7.9	20.4
D	5.8	8.2	14.0	19.2	32.7	11.4	63.3	14.8	7.9	22.7
全体	5.6	9.4	15.0	20.0	35.4	10.1	65.6	12.1	7.3	19.4

また，ランク別の集計結果に着目すると，さすが，Aランクの高校に在籍する生徒の方が，B，Cランクの高校生よりも，学校に楽しさを感じている割合が高いが，図5から明らかなように，その差は，さほど顕著ではない。

入学までのプロセスでは，生徒たちの間でAランクの高校に入れるのか，それとも，Bランクかと，悲喜こもごものドラマが展開されたであろう。しかし入学してからの気持は，少なくとも，学校の楽しさに限るなら，どこの高校に入ろうと，大きな開きが認められないようである。

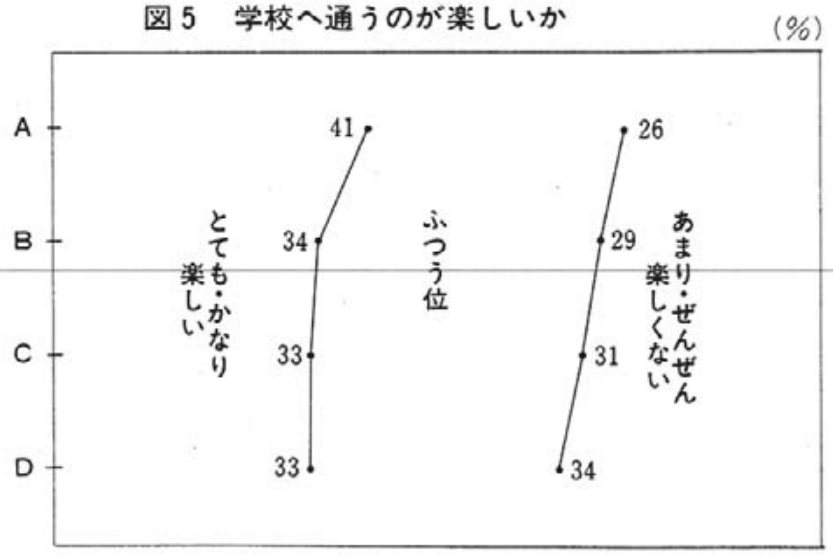
そうした考察は，もう少し後にゆずるとして，学校生活の楽しさを，学年別に集計し直すと，

Aランク	高1	39.9%
	高2	43.2%
	高3	37.8%
Bランク	高1	36.3%
	高2	33.5%
	高3	31.7%
Cランク	高1	33.2%
	高2	35.5%
	高3	31.2%
Dランク	高1	33.7%
	高2	31.8%
	高3	32.3%

（上記の数値は，「とても」～「やや」楽しいと答えた者の割合）

のように，学校のランクにより，多少の変化が認められるが，全体としてみると，学年が上るにつれて，楽しさが増すことはなく，特に，高3に入ると，進学が近づくためか，楽しさの減少が目につく。しかし，この場合も学年による違いは，さほど多くはない。

図5　学校へ通うのが楽しいか



授業が楽しみなのは，1割

今まで，一般的な形で，学校の楽しさをとりあげてきた。しかし，一口に楽しさといっても，学校生活は，さまざまな活動領域から成り立っている。そこで，①友だちと話している時，②クラブ活動などの時間，③授業を聞く時，④先生との関係の4領域に分けて領域ごとの楽しさを尋ねてみた。

くわしい数値は，表13に掲げたが，それを要約したのが，図6である。この中で特に目につくのが，「先生との関係」や「授業を聞く時」に対する評価の低さであろう。もちろん本来，授業そのものは多くの生徒にとって，興味の抱けない対象かもしれない。また，ここでは，同じスケールで4つの領域を比較したかったため，「楽しい」―「楽しくない」の7段階尺度を利用したが，授業などについては，「充実感を持てる」あるいは，「関心を抱ける」というような設問を用いた方が適切だったとも考えられる。しかし，そうした事情を配慮しても，なお，「やや」を含めて，「授業を聞いている時楽しい」生徒が10%，そして，「先生との関係を楽しいと思うことがある」が13%とは，あまりに低い数値という気がする。

なにしろ，5割を越える生徒がむしろ積極的に，「授業は楽しくない」，4割近い生徒が，「先生との関係はつまらない」と答えているのである。友だちと雑談をしている時は楽しいし，クラブ活動にも興味を持てる。しかし，授業にしらけきった態度で出席する。そうした高校生像を，図6は，端的に示しているように思われてならない。

実はこうした結果におどろいた筆者は，研究室に出入りしている学生たちに，高校生活についての感想を尋ねてみた。教員養成大学であるから，彼らの多くは，いわゆるBランクの高校の卒業生で，AランクやCランクの卒業生も多少まじっているという構成である。しかし，卒業高校に関係なしに，彼らは授業はつまらなかったと言う。しかも，彼らは，そうした授業のつまらなさにあきらめに近い気持を抱いていたようなのである。「どの授業も，そうなんだから，授業はつまらないものと思うより仕方なかった」，「生徒の方にも，やる気がなく内職ばかりしているのがいたから，考えてみると先生ばかりは責められない」，「そんなことをいっても，一握りのよくできる生徒にしか目を向けない先生が多かった」など，こうした授業論争はとどまるところを知らなくなる。

こうした傾向は，図6にもあらわれており，A，B，C，Dのランクに関連なく，「友だちと話している時は楽しいが，先生との関係や授業に楽しみを感じられない」という生徒が8割を越えている。

学校教育というからには，授業が，学校の中枢を占めるのが当然である。とはいっても，仮に，Dランクの高校生が，授業についていけないから勉強がおもしろくないというのであるなら，一応は納得もできる。しかし，学業に自信を持っているはずのAランクの高校でも，授業のつまらなさが語られているのは，すでに述べた通りである。

さらに，図7から明らかなように，そうしたつまらなさは，高1，高2，高3という学年差に関連なく，普遍化している。となると，高校の授業が魅力を欠くふんい気は，ランクや学年を問わず，すべての高校を包んでいる計算になる。

もっとも，高校生活全体を，中学生時代と対比させると，図8に示したように，「中学の方が楽しかった」42%，「今の方が楽しい」33%，「同じくらい」25%と，高校生活そのものを否定する度合はさほど高くはない。友だち関係の絆が，高校生活の暗い気分を多分に救っているのであろうか。

表13　領域別の高校生活の楽しさ

(%)

		楽しい				ふつうぐらい	楽しくない				
		とても	かなり	小計	やや		やや	小計	かなり	とても	小計
友と話している時	A	21.5	31.9	53.4	28.6	13.7	2.1	44.3	1.3	1.0	2.3
	B	22.4	31.9	54.3	27.8	13.9	1.8	43.6	1.3	0.8	2.1
	C	32.3	30.0	62.0	22.3	12.3	1.4	36.4	0.8	0.8	1.6
	D	36.0	27.9	63.9	22.2	11.3	1.1	34.5	0.9	0.7	1.6
	全体	28.5	30.4	58.9	24.7	12.7	1.6	39.3	1.0	0.8	1.8
クラブ活動などで	A	13.9	21.3	35.2	21.6	27.9	5.3	54.7	3.2	6.9	10.1
	B	13.5	22.1	35.6	22.4	25.0	5.5	53.0	5.6	5.8	11.4
	C	12.1	17.1	29.2	22.3	28.3	5.8	56.3	6.3	8.2	14.5
	D	13.0	17.3	30.3	21.7	23.5	7.0	52.2	10.1	7.4	17.5
	全体	13.0	19.1	32.1	22.0	26.5	5.9	54.4	6.2	7.3	13.5
先生との関係	A	2.4	2.8	5.2	11.2	47.5	11.0	69.7	10.2	14.9	25.1
	B	1.6	2.2	3.8	8.7	51.2	8.6	68.4	13.0	14.8	27.8
	C	1.5	2.5	4.0	8.3	45.0	8.7	62.2	13.0	20.8	33.8
	D	1.6	2.4	4.0	7.8	45.3	8.0	61.1	15.4	19.5	34.9
	全体	1.8	2.5	4.3	9.0	46.8	9.1	64.9	12.8	18.0	30.8
授業を聞く時	A	2.1	2.3	4.4	10.0	31.7	16.5	58.2	17.1	20.3	37.4
	B	1.7	1.9	3.6	8.4	32.2	14.9	55.4	22.4	18.6	41.0
	C	0.8	1.3	2.1	4.8	29.0	15.7	49.5	22.3	26.1	48.4
	D	1.1	1.2	2.3	5.4	35.2	13.6	54.4	22.8	20.5	43.3
	全体	1.3	1.6	2.9	6.9	31.5	15.3	53.7	21.2	22.2	43.4

図6　学校生活の領域別の楽しさ

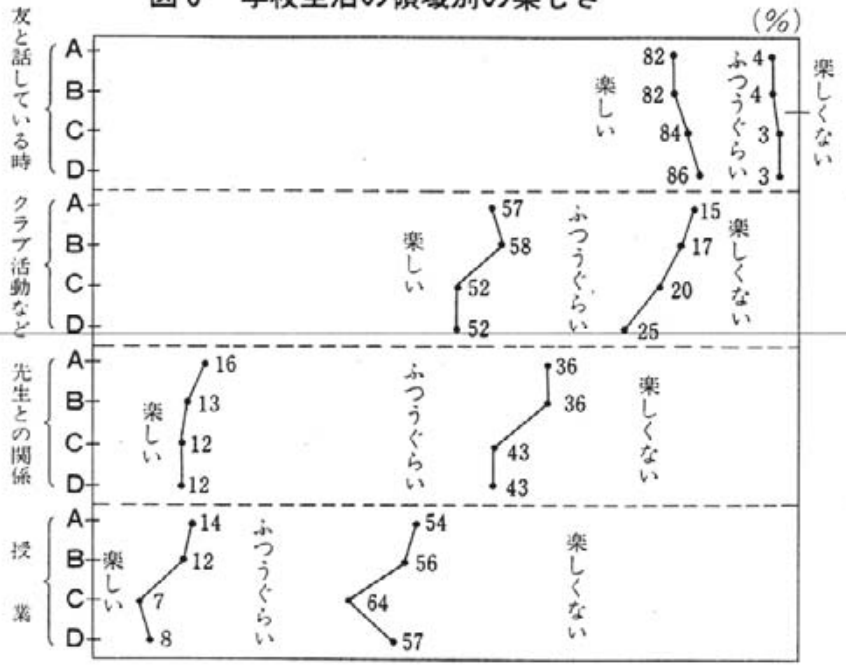


図7　授業の楽しさ×ランク別学年

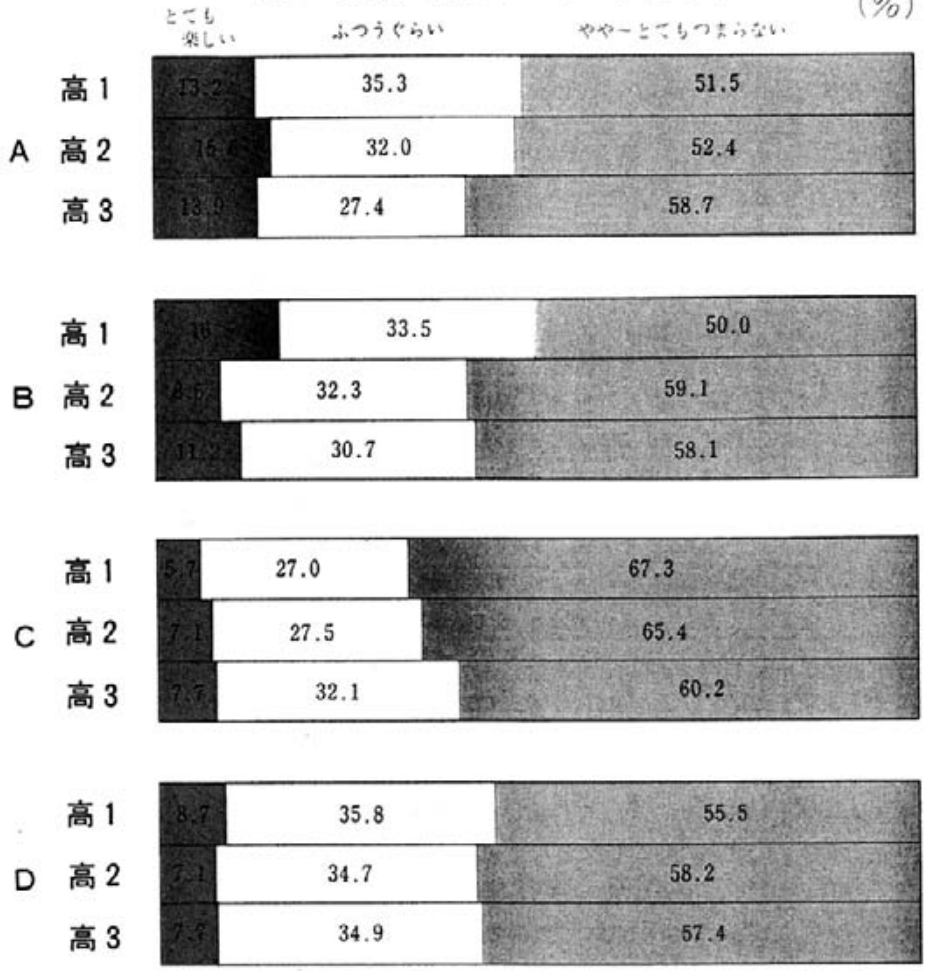
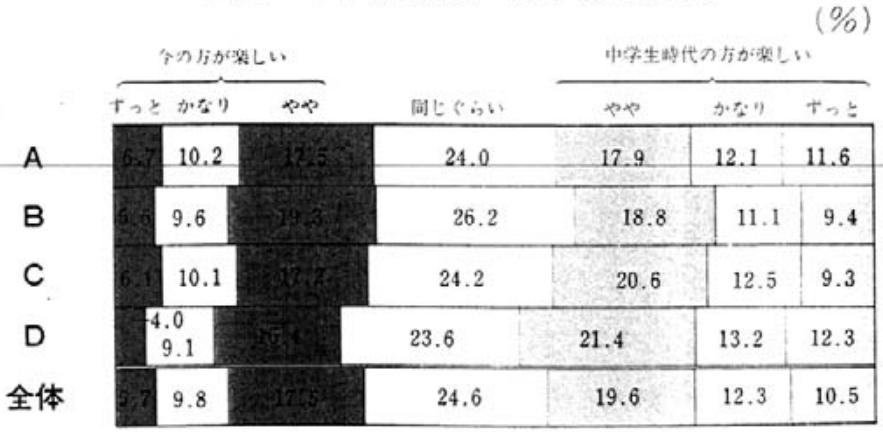


図8　中学時代と比べた学校の楽しさ



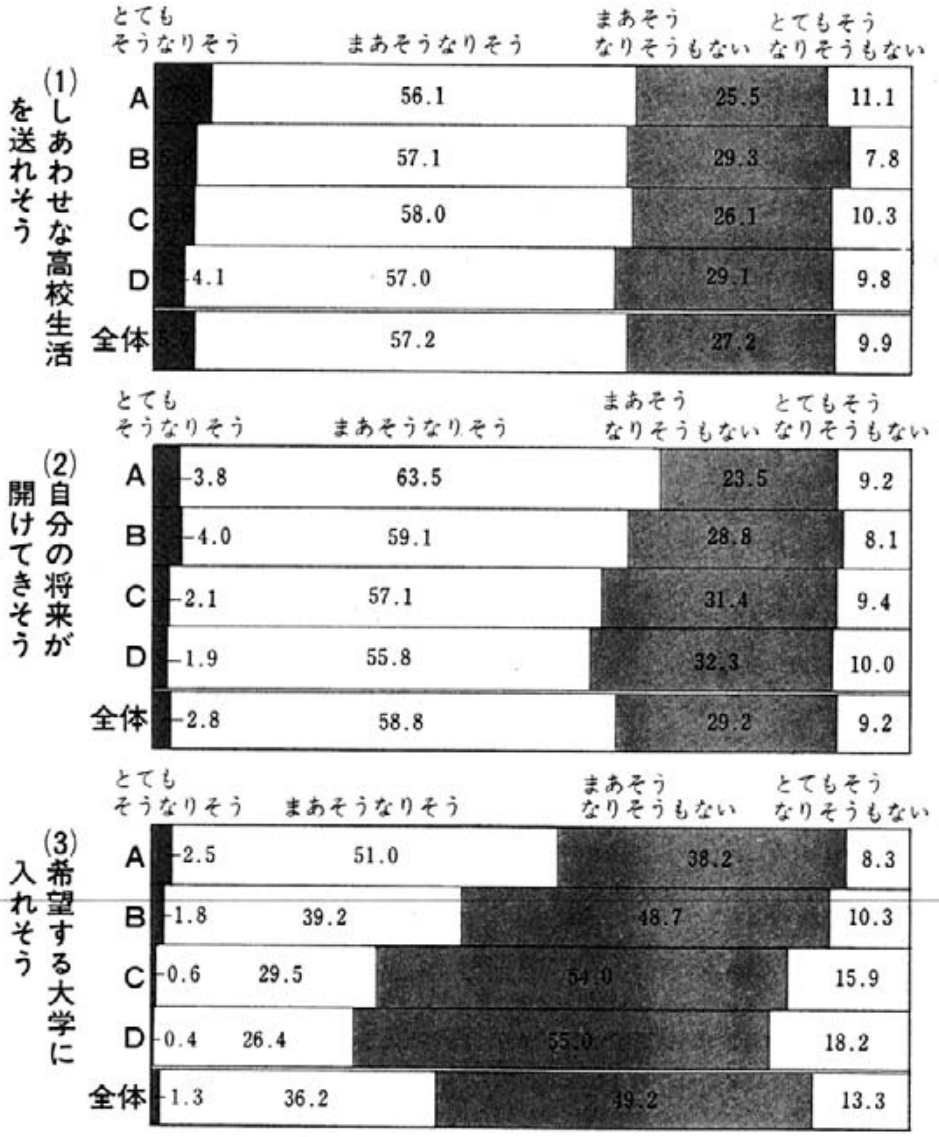
2） 高校生活の評価

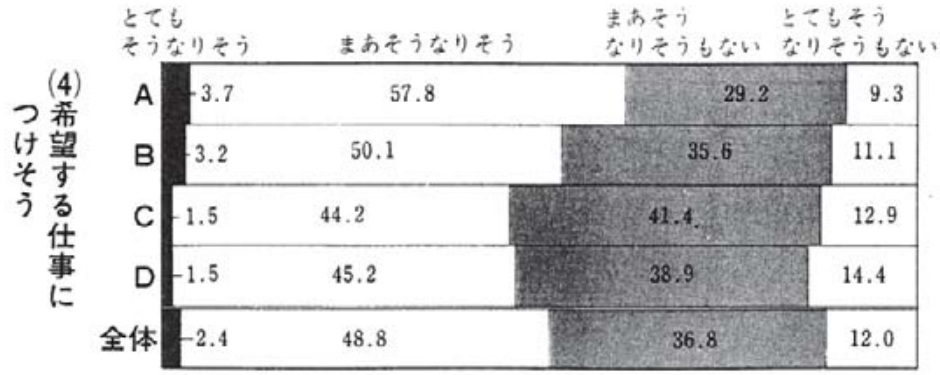
入学時より下がってきた評価

前章図4が示していたように，入学した時点で，生徒たちは，それなりの期待を高校生活に抱いていた。それでは，そうした期待は，高校生活を送る中で現在どのように変化してきているだろうか。

現在の気持を，図4と同じ4つの領域について，ランク別に集計してみると，図9のようになる。

図9　入学してからの気持ち　（%）





この結果を要約すれば，

① 高校生活が「まあ楽しい」という気持は，ランクに関係なく，入学時にひきつづき現在もすべての高校に認められる。友だち関係の楽しさが，こうした感じを支えているのであろう。

② 希望大学への入学見通しは，ランクにより，かなりの開きが認められ，Aランク53%，Bランク41%，Cランク30%，Dランク27%のような数値となる。

③ 進学可能性と同じように，希望する仕事につけるかどうかについても，ランク間の開きが顕著である。

④ 図10から明らかなように，入学時の気持と対比させると，どの項目とも，15%前後，現在の方が，評価が低下している。入学時に考えたほど，現実は明るくなかったというのであろう。もっとも現実は，つねにきびしいものであるから，この程度の開きが生ずるのはやむをえないとも考えられる。

⑤ しかし，図10を見るとランクにより，入学時と現在との落差が認められるのが注目される。「希望する大学への入学」に例をとると，Aランクの高校の場合，入学時に希望する大学へ入れそうと思った割合が80%であるのに，現在，そう思える生徒は53%と，27%の開きが認められる。しかし，B，C，Dランクの落差は，それぞれ，29%，19%，10%である。また，「希望する仕事につける」の落差も，Aランクの22%以下，23%，18%8%の通りである。

C，Dランクの高校へ入学した生徒の場合，始めから希望を低めにするので，入学後の失望が少なく，それに対し，A，Bランクの生徒は，入学直後の喜びが大きかっただけに，挫折感が高まるのであろうか。

以上の①～⑤を，さらに要約すれば，①高校生活の楽しさについては，ランク間の開きは認められない。しかし，②進学や就職などの将来の見通しについて，ランク間の開きが存在する，とはいえ，③入学後，挫折感を味わう可能性はトップランクの高校の方が大きいもののようである。

そこで，希望する大学へ入れると思う割合を，ランクと学年別に集計し直すと，図11のような結果が得られる。学校のランクによって，学年別の気持の推移に変化が認められ，

Aランク＝高2の時，希望が高くなり，高3へ入ると，あきらめの気持が強まる

Bランク＝高2の時，いったんあきらめ，高3へ入って，気持をとり戻す

C，Dランク＝学年による変化が認められない

のような傾向が見られるが，結果についての考察は，もう少し後にゆずり，別のデータを紹介してみよう。

図10　どんな高校生活を送れそうか（入学時と現在の推移）

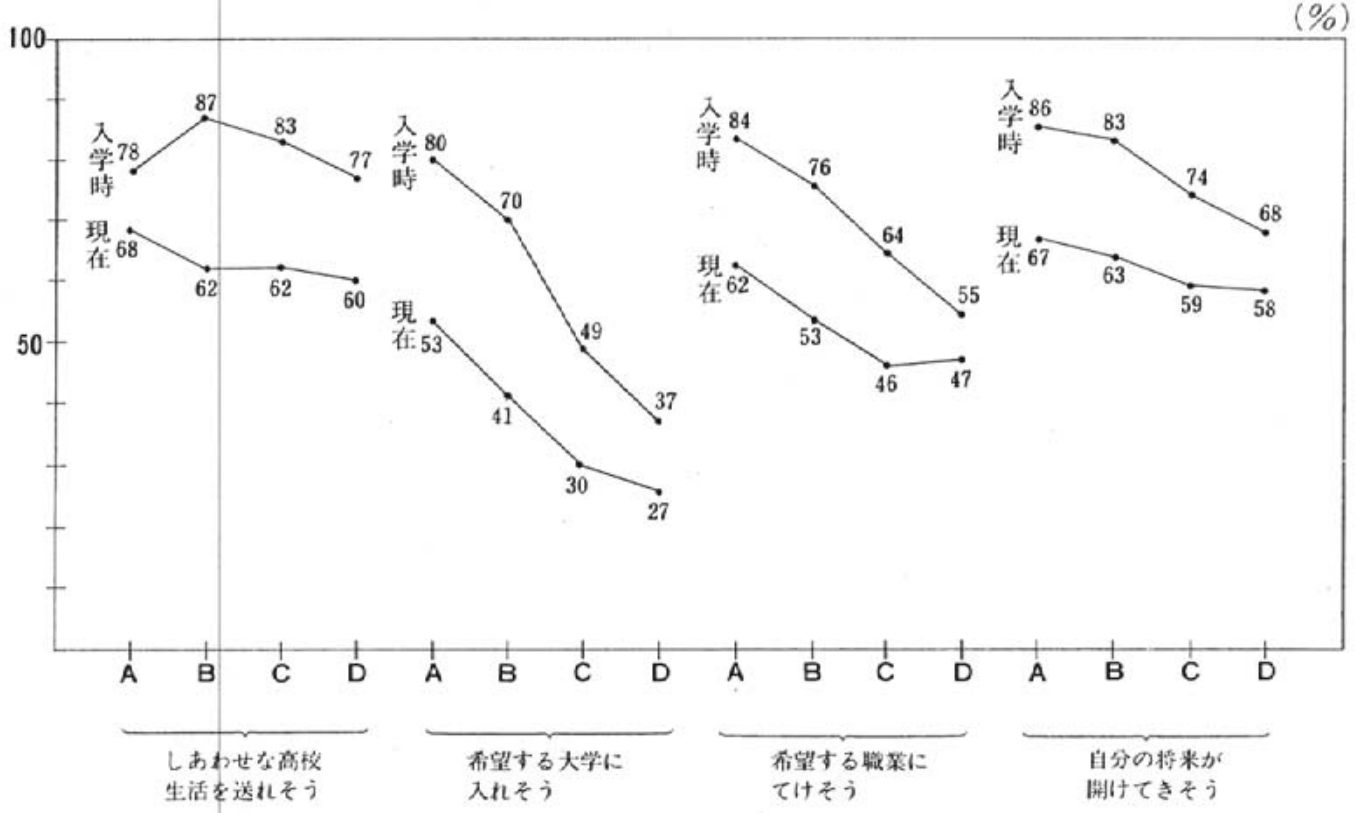
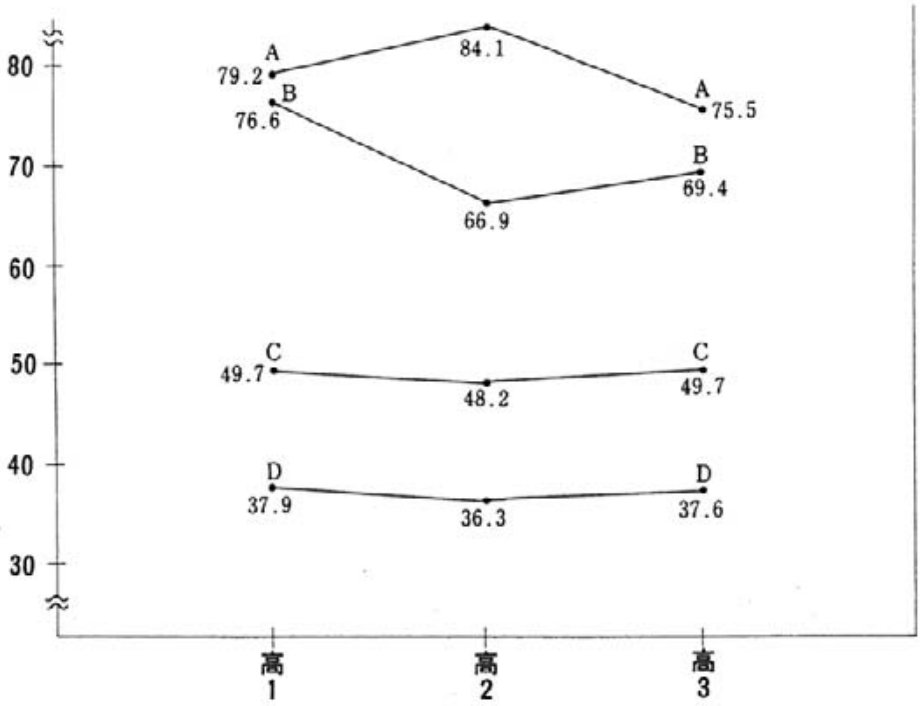


図11　希望する大学へ入れそう×ランク別学年　（%）



注）図中の数値は「とても」「まあ」希望する大学へ入れそうと思う割合。

Aランクに進学意欲の高い友がいる

表14は，在籍する高校の友人に対する評価をあらわしている。その中で，「そうした友だちが10人中５人以上いる」と思う場合に限定して，表14を要約すると，図12のような数値が得られる。すなわち，

① ランクが高くなるほど，「未来に意欲を燃やし，良い大学へ入りたいと勉強をしているまじめな生徒」の割合が多くなる。

② AからDへとランクが移るにつれて，「人間的にみちたりた生活をしている生徒」の占める割合が増す。

の通り，つきつめていうと，「未来に意欲を抱き，勉強重視」＝Aランク，「未来はともあれ，現在を楽しむ」＝Dランクのような分化が，生徒間に認められる。

もっとも，表15に掲げたように，生徒たちの将来の進路予想には，ランクにより，大きな開きが認められる。差を明確にするために，表15をグラフ化した図13が示すように

4年制大学進学希望者	Aランク	97%	(88%)
	Bランク	86%	(69%)
	Cランク	54%	(35%)
	Dランク	32%	(19%)

注）（　）内は，「ふつう程度以上のむずかしい大学」入学希望者

Aランクの高校生は難関の突破を目指し，Bランクでは，ふつう程度の難易度の大学入学を目標にし，C，Dの場合，大学よりも，短大や専修学校へ志向する生徒の割合が高まってくる。

表14　友だちに対する評価

(%)

		10人中10人	7～8人	5～6人	3～4人	1～2人	ひとりもいない
社会的に活躍したいと未来に意欲を燃やす生徒	A	9.4	14.5 (23.9)	16.2 (40.1)	20.0 (60.1)	28.4 (88.5)	11.5 (100.0)
	B	5.8	7.7 (13.5)	12.3 (25.8)	20.1 (45.9)	38.5 (84.4)	15.6 (100.0)
	C	2.3	4.0 (6.3)	9.5 (15.8)	22.5 (38.3)	44.2 (82.5)	17.5 (100.0)
	D	2 3	4.0 (6.3)	10.7 (17.0)	26.1 (43.1)	43.6 (86.7)	13.3 (100.0)
	全体	4.7	7.3 (12.0)	11.9 (23.9)	22.1 (46.0)	39.2 (85.2)	14.8 (100.0)
良い大学へ入りたいと勉強一途の生活を送る仲間	A	12.0	17.5 (29.5)	14.8 (44.3)	18.3 (62.6)	26.4 (89.0)	11.0 (100.0)
	B	4.3	8.7 (13.0)	12.0 (25.0)	20.4 (45.4)	37.9 (83.3)	16.7 (100.0)
	C	2.6	4.1 (6.7)	8.2 (14.9)	19.7 (34.6)	43.4 (78.0)	22.0 (100.0)
	D	2.4	3.9 (6.3)	12.5 (18.8)	21.4 (40.2)	40.5 (80.7)	19.3 (100.0)
	全体	5.2	8.2 (16.4)	11.4 (27.8)	19.9 (47.7)	37.7 (85.4)	17.6 (100.0)
異性との交際など人間的に満ちたりた生活をしている仲間	A	4.1	4.6 (8.7)	11.1 (19.8)	26.2 (46.0)	42.8 (88.8)	11.2 (100.0)
	B	4.7	3.9 (8.6)	13.6 (22.2)	26.8 (49.0)	39.7 (88.7)	11.3 (100.0)
	C	3.6	7.1 (10.7)	16.5 (27.2)	29.5 (56.7)	34.0 (90.7)	9.3 (100.0)
	D	5.7	6.3 (12.0)	19.3 (31.3)	34.0 (65.3)	28.2 (93.5)	6.5 (100.0)
	全体	4.3	5.7 (10.0)	15.2 (25.2)	29.1 (54.3)	36.0 (90.3)	9.7 (100.0)

(%)

		10人中10人	7～8人	5～6人	3～4人	1～2人	ひとりもいない
クラブ活動などを通して高校生活を楽しんでいる仲間	A	6.3	13.9 (20.2)	27.3 (47.5)	26.3 (73.9)	19.2 (93.0)	7.0 (100.0)
	B	11.0	21.7 (32.7)	28.4 (61.1)	22.4 (83.5)	12.0 (95.5)	4.5 (100.0)
	C	10.1	16.4 (26.5)	25.8 (52.3)	26.9 (79.0)	15.4 (94.4)	5.6 (100.0)
	D	12.0	17.7 (29.7)	26.0 (25.7)	23.4 (79.1)	15.6 (94.7)	5.3 (100.0)
	全体	9.7	17.0 (26.7)	26.7 (53.4)	25.2 (78.6)	15.7 (94.3)	5.7 (100.0)
非行生徒だといわれてもしかたがない仲間	A	3.0	1.4 (4.4)	1.1 (5.5)	4.0 (9.5)	23.5 (33.0)	67.0 (100.0)
	B	2.8	1.3 (4.1)	2.0 (6.1)	4.8 (10.9)	28.0 (38.9)	61.6 (100.0)
	C	2.9	1.6 (4.5)	3.5 (8.0)	6.9 (14.9)	33.0 (47.9)	52.1 (100.0)
	D	2.9	1.7 (4.6)	3.1 (7.7)	8.3 (16.0)	33.8 (49.8)	50.2 (100.0)
	全体	2.7	1.6 (4.2)	2.6 (6.8)	6.1 (12.9)	29.9 (42.8)	57.2 (100.0)
いかにも高校生らしいまじめな仲間	A	13.0	18.7 (31.7)	16.5 (48.2)	18.9 (67.1)	24.9 (92.0)	8.0 (100.0)
	B	12.2	12.4 (24.6)	13.3 (38.9)	21.5 (60.4)	28.2 (88.6)	11.4 (100.0)
	C	8.3	10.0 (18.3)	16.5 (34.8)	22.1 (56.9)	30.6 (87.5)	12.5 (100.0)
	D	13.0	12.1 (25.1)	16.5 (41.6)	20.2 (61.8)	26.7 (88.5)	11.5 (100.0)
	全体	11.1	13.0 (24.1)	16.1 (40.2)	20.8 (61.0)	28.0 (89.0)	11.0 (100.0)

図12　次のような友だちが10人中５人以上いるか

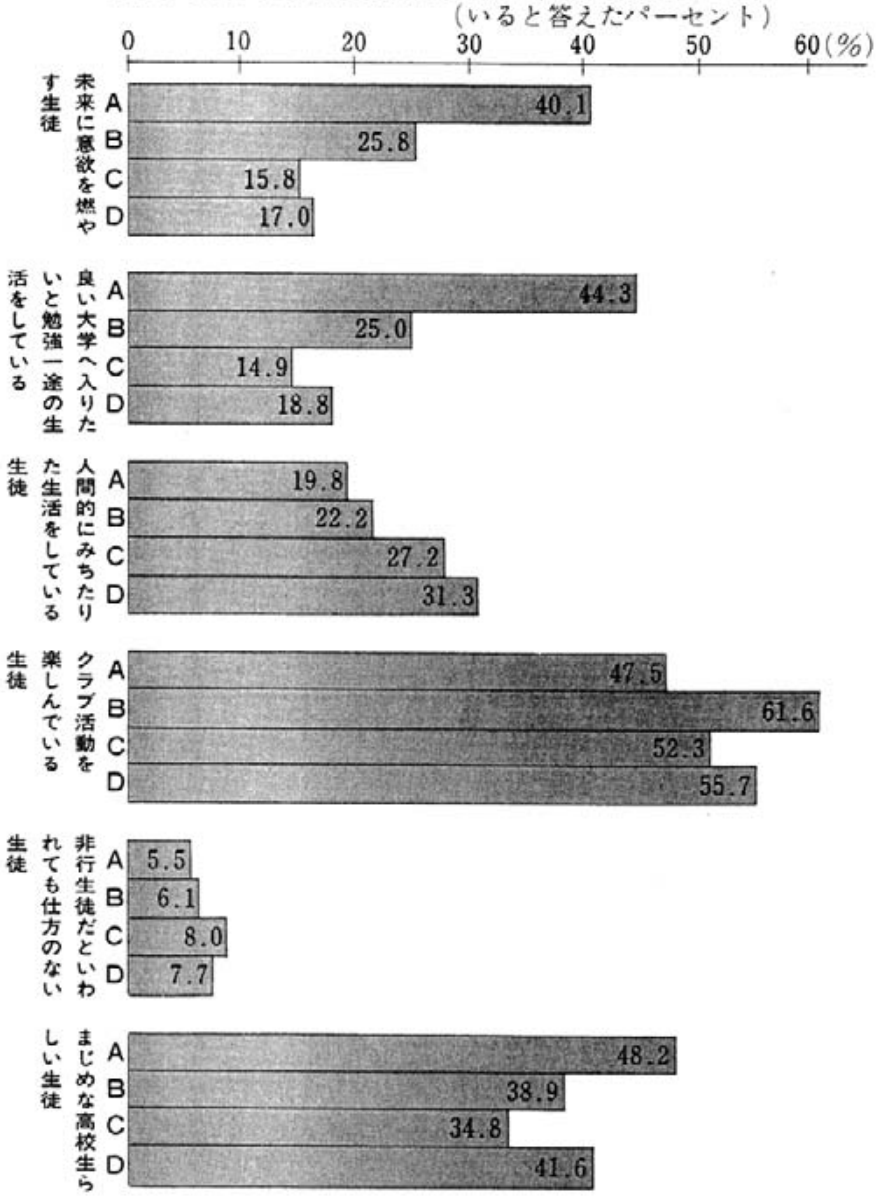
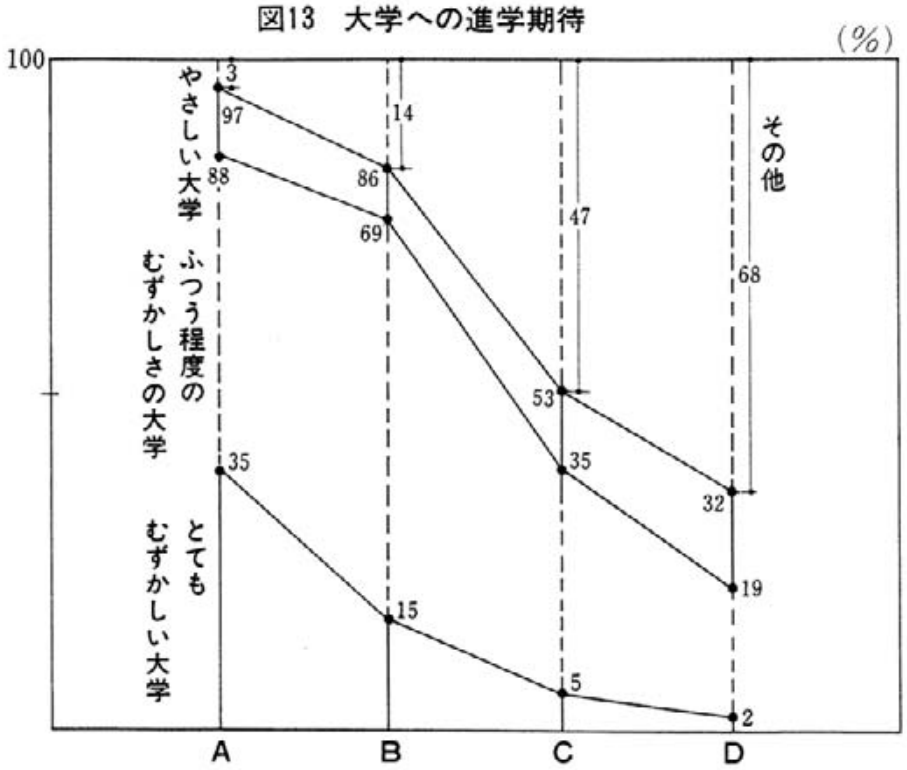


表15　将来の進路予想　（%）

	すぐにつとめる	専修学校へ	短大へ	入試のやさしい大学へ	ふつう程度のむずかしい大学へ	とてもむずかしい大学へ
A	1.8	0.9	0.7	9.1	52.1	35.4
B	5.2	4.0	4.9	17.4	53.8	14.7
C	15.7	14.8	16.0	18.1	30.1	5.3
D	19.0	24.6	24.8	12.7	16.8	2.1
全体	11.0	11.3	11.9	14.7	37.4	13.7

図13　大学への進学期待



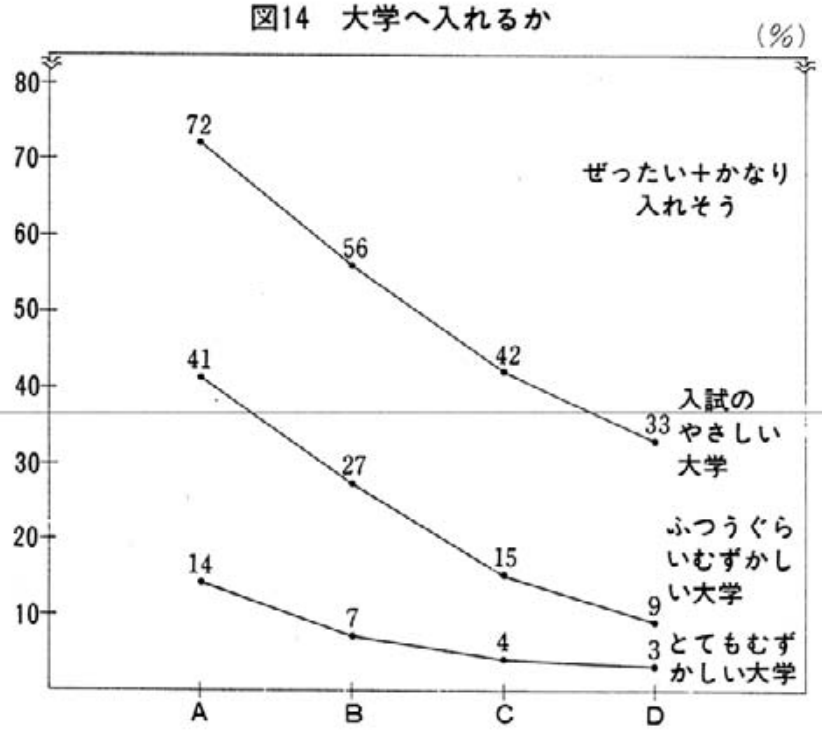
もちろん，こうした将来への志望は，たんなる願望ではなく，ある程度の見通しをふまえたものであろう。事実，生徒たちに，「一生懸命に勉強すれば，それぞれの大学へ，入れると思うか」を尋ねると，表16，図14のような結果が得られる。入試のやさしい大学はむろん，普通程度の難易度なら，なんとか入れそうと，Aランクの高校生は考えているが，しかし，B，C，Dと，ランクが移るにつれて，そうした見通しが薄らいでくる。

表16　一生懸命に勉強すれば大学へ入れるか

(%)

		入れるだろう			入れないだろう	
		ぜったい	かなり	まあ	たぶん	とても
入試のやさしい大学	A	43.2	28.5	24.6	1.3	2.4
	B	31.2	24.4	37.6	4.1	2.7
	C	19.3	22.7	46.8	8.5	2.7
	D	13.3	20.1	53.5	10.1	3.0
	全体	26.2	23.9	41.0	6.2	2.7
ふつうぐらいのむずかしさの大学	A	18.8	22.5	46.0	9.2	3.5
	B	12.5	14.0	47.8	20.7	5.0
	C	5.5	9.3	44.8	30.9	9.5
	D	3.2	5.9	42.5	37.4	11.0
	全体	9.6	12.7	45.2	25.0	7.5
とてもむずかしい大学	A	9.0	5.2	26.6	32.4	26.8
	B	5.0	2.2	17.2	31.6	44.0
	C	2.9	0.7	8.6	26.1	61.7
	D	1.8	1.0	5.3	24.9	67.0
	全体	4.8	2.1	14.0	28.4	50.7

図14　大学へ入れるか



ランクの意味

こうしたデータを手がかりとして考えると，高校間格差とは，学校そのものの問題でないことがわかってくる。ある高校には，学業成績に自信を持ち，大学進学の可能性を信じている生徒の占める割合が多いのに対し，そうでない高校では，進学を断念している生徒の比率が高い。そうした進学をめぐる意欲の強弱が，高校のふんい気を形づくっているように考えられる。

なお，表17は，自分自身のことでなく，「一流大学を受験したら，入学できそうな生徒がどれぐらいいるのか」を，現役と一浪の場合を想定させて，ランク別に集計した結果である。

そこで，「一浪して受験」を例にとって，表17をグラフ化すると，図15の通りとなる。つまり，Aランクの高校でも，「一浪すれば，一流大学へ半数以上の生徒が入学できるだろう」と思う割合は2割にすぎないが，「生徒の3割程度が入れそう」となると，4割強の生徒が，そう信じているし，「生徒の中の2割ぐらいは入学できる」ともなると，6割の生徒がそうした見方を支持している。

仮に，半数の生徒が，そう思える入学率を一応のボーダーラインとするなら，Aランクの高校だと，一浪すれば，ほぼ26%（図中のⓐ），Bランクでは，14%が入学可能な数値となる。しかし，C，Dランクの高校だと，入学可能な比率は5%前後である。

大学進学の見通しに，ランクにより上記のような開きが生まれるから，当然のことながら，卒業後の社会的な成功についても，ランク間に開きが著しい。

例えば，図16は，ビッグな目標を示して，頑張れば，そうした仕事につけるかどうかを尋ねた結果である。「頑張れば，医師になれそう」と思っている生徒は，Aランクの高校で38%，Bランク22%，Cランク18%，Dランク14%の通りである。

表17　一流大学へ入学できそうな生徒がどれぐらいいるか（%）

		0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%	35%	40%	45%	50%
現役で受験をしたら	A	6.8 (100.0)	32.5 (93.2)	13.7 (60.7)	8.5 (47.0)	9.1 (38.5)	6.1 (29.4)	8.1 (23.3)	3.9 (15.2)	3.5 (11.3)	1.1 (7.8)	6.7
	B	26.2 (100.0)	45.4 (73.8)	12.6 (28.4)	4.6 (15.8)	3.3 (11.2)	2.0 (7.9)	1.7 (5.9)	0.6 (4.2)	0.7 (3.6)	0.1 (2.9)	2.8
	C	48.7 (100.0)	37.2 (51.3)	6.6 (14.1)	2.7 (7.5)	1.9 (4.8)	1.3 (2.9)	0.7 (1.6)	.0.2 (0.9)	0.4 (0.7)	0 (0.3)	0.3
	D	55.2 (100.0)	31.2 (44.8)	5.9 (13.6)	2.7 (7.7)	2.6 (5.0)	0.8 (2.4)	1.0 (1.6)	0.1 (0.6)	0.2 (0.5)	0 (0.3)	0.3
	全体	35.6 (100.0)	36.4 (64.4)	9.3 (28.0)	4.4 (18.7)	4.1 (14.3)	2.5 (10.2)	2.8 (7.7)	1.1 (4.9)	1.2 (3.8)	0.3 (2.6)	2.3
一浪したら	A	2.1 (100.0)	9.7 (97.9)	17.6 (88.2)	10.2 (70.6)	11.5 (60.4)	5.8 (48.9)	9.1 (43.1)	3.4 (34.0)	7.6 (30.6)	3.0 (23.0)	20.0
	B	7.4 (100.0)	24.7 (92.6)	23.6 (67.9)	11.0 (44.3)	10.2 (33.3)	4.9 (23.1)	7.3 (18.2)	1.3 (10.9)	3.5 (9.6)	0.7 (6.1)	5.4
	C	14.5 (100.0)	36.7 (85.5)	21.3 (48.8)	9.0 (27.5)	7.3 (18.5)	2.9 (11.2)	3.5 (8.3)	1.1 (4.4)	1.5 (3.7)	0.4 (2.2)	1.8
	D	19.0 (100.0)	34.7 (81.0)	20.1 (46.3)	9.0 (26.2)	6.2 (17.2)	3.5 (11.0)	3.1 (7.5)	0.9 (4.4)	2.0 (3.5)	0.5 (1.5)	1.0
	全体	12.1 (100.0)	27.5 (87.9)	20.6 (60.4)	9.7 (39.8)	8.6 (30.1)	4.1 (21.5)	5.5 (17.4)	1.7 (11.9)	3.4 (10.2)	1.1 (6.8)	5.7

図15　一流大学を一浪して受験したら　（%）

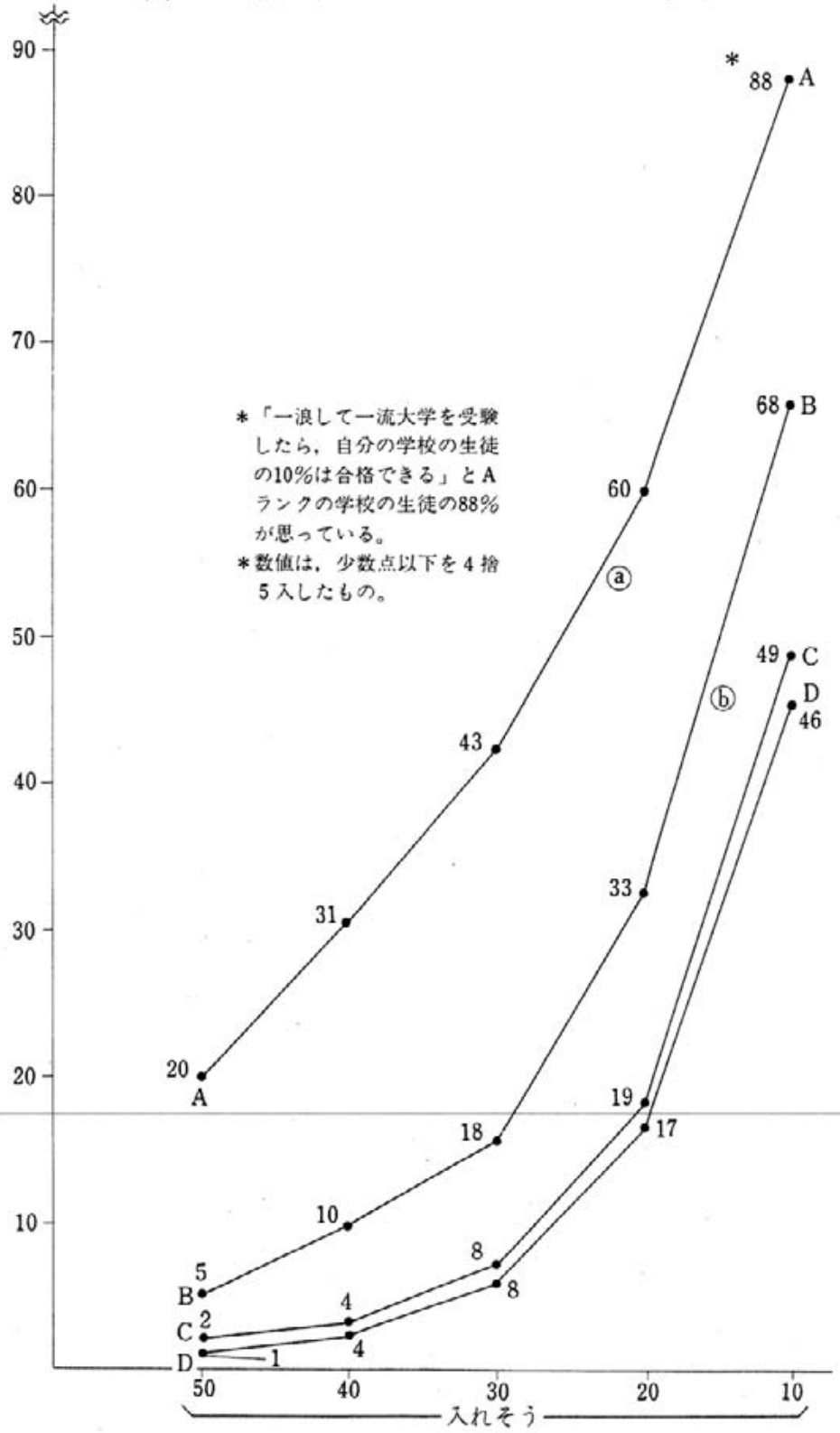
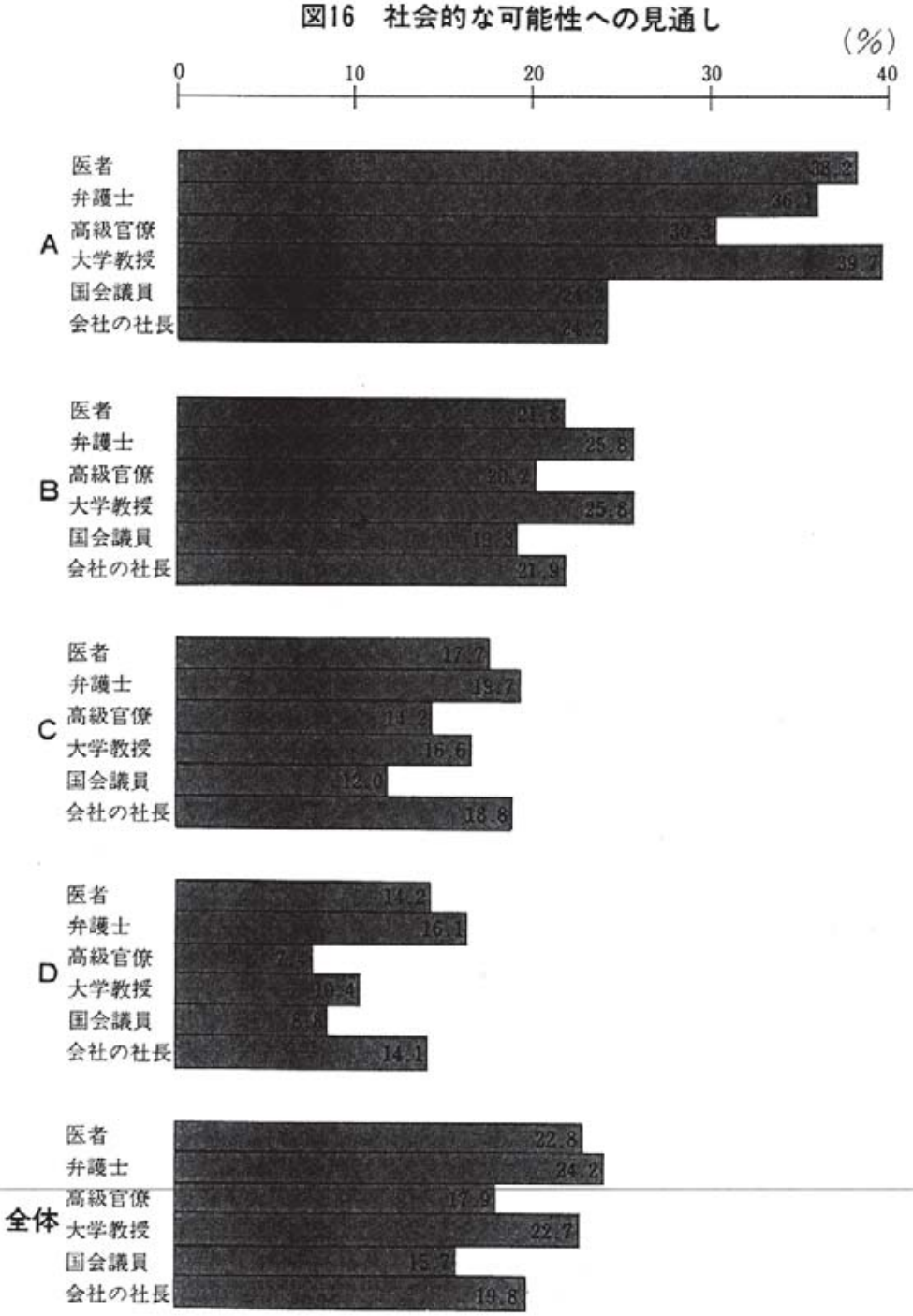



図16　社会的な可能性への見通し